日本醫學史講

冨士川游著

60
659

始

日本醫學史講

醫學博士
文學博士 冨士川游先生述

九州帝國大學醫學部雜誌部

日本醫學史講目次

一　序論……一
二　西洋醫學史……六
三　印度醫學史……一三
四　支那醫學史……一六
五　日本醫學史……二〇
(一)　太古の醫學……二〇
(二)　奈良朝以前の醫學……二三
(三)　奈良朝の醫學……二五
(四)　平安朝の醫學……二六
(五)　鎌倉時代の醫學……三〇
(六)　室町時代の醫學……三三
(七)　安土、桃山時代の醫學……三三
(八)　德川時代の醫學……三七
イ、支那系統の醫學……三七
ロ、漢蘭折衷の醫學……四四
ハ、和蘭系統の醫學……四九
ニ、專門學科發達の狀況……五八
(九)　治療史……六四
(一〇)　疾病史……六七
(一一)　醫人道義學……七九

60-659

日本醫學史講

醫學博士
文學博士　富士川游講述
學生　山川晉一郎筆記

（大正十二年一月十五日より二週間
九州帝國大學醫學部に於て）

大正
12.6.2
內交

一、序論

醫學の歷史は醫學の一部分であつて重要な科目であるけれども、一般に度外視されてゐる傾がある。科學としての醫學の歷史を考ふるに當つては、文獻の研究其のものが已に醫學の歷史の研究の一つであるが此の方面は暫く措く。蓋し文獻は最近の知識であるから醫學の發達についての大きな問題には餘り觸れてをらず、醫學史といふものは之とは別に研究せなければならぬのである。卽ち醫史を特別の科目として研究せなければならぬ。さて私達の科學としての醫學の歷史は次の方面から之を觀察する。

第一、疾病に就いての歷史的觀察。之は流行病を主とする。獨逸で歷史的病理學(historische Pathologie)

として研究されて居るものである。元來病理學は臨床的にも解剖的にも研究を要するが歴史的にも亦知らなければならぬ。

第二、眞理の探究。つまり單に偉人の歴史のみならず、その考の內容及び過去の事實を認識するにある。各時代の精神を見るには當時の著述を全部見なければならぬ。十六世紀の頃自然科學は芽を吹いた。醫學では解剖、生理に基礎の考へを與へ、醫術及び疾病の觀察にも新生面を開いた。故に醫學の歴史を研究することは自然科學との關係を親密にするわけである。又一方で哲學とも親密なる關係がある。つまり疾病の本態を認識するのである。十九世紀初め迄は哲學は著るしい影響を醫學に及ぼした。十九世紀以後は自然科學が興つて影響を與へたが哲學の影響も無視することは出來ぬ。

第三、宗教の歴史。宗教は醫學を妨げたり時には進めたりして居る。モハメッドの教が盛だつた時アラビヤの醫學は衰へた。中古のキリスト教は自然科學と醫學を壓迫した。然かも又一方には醫學の進歩を助けた。看護 Krankenpflege などはキリスト教のおかげである。衛生の第一歩も宗教にある。モーゼの法典、コーラン法典にも見ゐて居る。

文化の歴史が關係あることは言ふ迄もない。風俗の歴史（殊に Sittengeschicht）もさうだ。醫學の盛なる時は國家が秩序を保つて居た時である。

第四、Kurpfuscher（非醫者）の歴史。ギリシャのリジエンテッサルスは自分の墓に醫師征服者と書かせた。彼れ曰く『ヒポクラテスはうそつきだ。多くの醫者は馬鹿。自分も亦馬鹿。』彼れは六ヶ月で醫者を教育した。非醫者と常に伴へるは民間藥（Volksmittel）である。もとこれ野蠻人の藥である。

Praehistorische- od. Ur-medizin の時既に開腹術をやつて居る。マッサージやギプスなども用ひた。キニーネ、コカイン、モルフィン等皆民間藥である。獨逸の Kurpfuscher は Naturarzt と言ふ。彼等の機關雜誌の "Naturarzt" は醫事週報の十倍もよく賣れる。彼等は Schularzt（學校を出た醫者）に向つて言ふ。『お前達のつくつたのはアンチビリンのみだ。他は皆 Naturarzt が教へたものばかりだ』と。プリースニッツ（Priessnitz）は無學の人であつたが、彼れのグレーフェンベルグに於ける水治療法は盛んなものであつた。エルテル（Oertel）はアンスバッハの中學校の言語學の先生であつたが氣候療法を唱道した。ツール、ブラント（Thure Brandt）はストックホルムの陸軍大佐であつた。ドーフル散（Dover's Pulver）は其の名の由來をせんさくすると何んぞ知らんドーフル（Dover）なる海賊から出たものだ。どうしたわけかよく分らぬが、何でも海賊のことであるから諸々の地に行つては阿片、吐根、刺絡を用ひて居たものだらう。蓋しこの三つは昔は Drei-grundmittel としたものだ。兎に角非醫者並びに民間藥は研究して興味あるものである。

第五、繪畫、彫刻、詩歌、文藝等藝術方面の研究が醫學の歴史に材料を與へる。例へば鎌倉時代の繪卷物に疾の草紙（奇疾草紙）がある。卽ち十二世紀の頃の作である。土佐光長が書いたものでこれをあけて見ると色々面白き事がのつて居る。眼球震盪症 Nystagmus を記載して風病など言つてをる。

歴史科學と自然科學とは一體如何に關係するか。之は認識論（Erkenntnistheorie）的に考へる必要がある。精神科學と自然科學とを區別する人とせぬ人とあるが、區別する側の根據とする所は、研究の對照、研究方法及び認識の目的が違ふといふにある。研究の對照については精神卽ち歴史科學は人間の科

學、換言すれば人間のつくつたものを研究し、自然科學は自然にあるものを研究すると言ふ。然し認識論的に考へるとこんな事はすぐ破れる。人間の構造と機能は何れに屬するかを考ふれば明かである。自然科學の領分の内にも歴史科學はある。個體發生學(Ontogenie)はそれであり系統發生學 Phylogenie は尙更然りである。研究の方法としてはベイコンが自然科學には歸納法を歴史科學には演繹法を用ひるとしたが實際は何れも用ひられる。人間が豫測せないで仕事の出來るわけはない。故に之れ迄は常に歸納的(Induktiv)演繹的(deduktiv)に用ひてをる。認識の目的については自然科學は經驗科學(Erfahrungswissenschaft)と言ふも人間のすることは皆經驗である。一體智慧 Intelligenz とは經驗をさきにのばす事に他ならぬ。故に學術上の概念を決めるには漠然たることではいかぬ。要するに自然科學及び精神科學は同じであつて唯方向が違ふのみだ。歴史は多くの現象を集めて按配し因果の法則(Kausalität)を見るのであり、自然科學は同じ種類の現象を集めて其の間の普遍の法則を見るのである。更に醫學の歴史の科學的意義としては歴史は現今の知識に確實なる證明を與ふる爲め、以前の事を見て置くのであつて、骨董ではない。醫學の歴史は人間の綜合的知識、具體的の事實を與ふる爲めに必要である。

醫師として世に出る以上は抽象的の概念のみを知つて居ても病氣を治療するには何の役にも立たぬ。のみならず抽象的の概念を加ふる程具體的の事實とは離れるものである。けれども學問の目的としては止むを得ぬから、從つてそれをまとめなければならぬ。それをまとめねば具體的に病人を取扱ふ時に差し支へる。分化が精密になるのは學問の進歩上止むを得ぬ。

次には醫學史の倫理的の意義(ethische Bedeutung)を一口述べて置く。醫學史の研究は科學的の他に

實際に當つて倫理的の意義を有する。古人と話をすると現在のきたない心がなくなると日本でも言ふ。醫學史の知識に興味を持つ事は精神的生活をする上に少くとも必要のものである。彼のフーフェランド(Hufeland)はギェーテが首相の頃ワイマールのエナ大學教授であつた。今から約百二十年前ベルリン大學が創立される時にフーフェランドが最初に呼ばれて學長になりブロイセェン王の侍醫も兼ねて居た。彼の著"Empiridion medicum"1796 は五十年間の經驗の結晶である。今日の所謂内科書である。我國では緒方洪庵譯(一八三六)扶氏經驗遺訓がある。杉田成卿譯『扶氏醫戒』もある。内容は Theoretischer Teil と Praktischer Teil とに分れて居り Theoretischer Teil では大體 Natur u Kunst, Diagnostik u Erkenntniss des Heilungsobjects. Therapeutik etc. につき述べてある。而して praktischer Teil 卽各論の前に格言とも言ふ可きが五つ六つならべてある。『理性的行爲は考察なしには出來ぬ。Ohne Denken gibt es kein Vernunft.』『もし助けることが出來なければせめて害をするな。Kannst du nicht helfen, so schade nicht.』『病氣はなる可く一般的、病人はなる可く個人的なる可し。』支那の書に『肺腑能ク語ラバ醫師色如シ土』とあるのと一脈相通じたる警句である。尙『神が病氣を直し醫師が禮を受ける』等と。終りに醫師の態度(Die Verhältnisse des Arztes)を述べ病人、同僚、國家に對するの態度を敎へて居る。

治療の第一の根源が病める者を助ける衝動である故、今日も尙然る可きである。他人の爲めに生きて自分の爲めに生きぬ事が醫師の職業の本態であらねばならぬ。卽ち "Leben für Andere, nicht für sich, ist das Wesen seines Berufes." (Hufeland)

歴史的に醫學を研究することが學問の研究と言ふ以外に倫理的の意義をも有することになる。精神を

向上する上に必ずやいくらかの益があるだらう。（以上　布施正則筆記）

（日本醫學史の研究に必要な範圍内に於ける西洋、印度及び支那の醫學變遷に就て述ぶれば大略次の樣である。）

二、西洋醫學史

現代醫學の研究は解剖學を基礎とせるに反し、醫學の歴史は源を治療に發して居る。有史以前の事は考古學及び比較人類學に依るの外はないが、太古には醫術と稱し得べき事柄は存在して居なかつた。初めは何處の國でも獨立に治療に關する略同樣の迷信、就中原始的な妖魔說が廣く行はれて居た。

西暦前五、六千年から同六百年に亘り埃及ナイル河並にメソポタミアのユーフラトの流域に居た民族は原始時代から文化時代へ移り行く程度の醫學の知識を有し、其等は楔形文書 Keilschrift に書き殘されて居る。

メソポタミア、バビロン、アッシリアの住民は宇宙の森羅萬象に一定の法則あるを知り、且つ天文學にも精しかつたので、萬病は日月星辰の關係で起ると考へて居た。當時の醫事は全く僧侶の手中に在つた。豫言者は病の豫後を云ひ、其のバビロンに在る者をバルー Baru と稱した。又頻りに軟膏を作りしアバラク Abarakku なる僧も居た。西暦前四、五千年頃には確に醫者と稱し得る特別の人が居て、病を治癒し、其の報酬を受けて居た。バビロンの妖魔說も既に定まり、Utukka（喉の病の魔）Asakku（諡

妄の魔）Tiû（頭痛の魔）Ekimû（赤痢の魔）等が居た。東印度の山地の妖魔に就いても同樣の事があつて、痘瘡の魔は奇麗だと考へて居た。其の譯は同地に於ては痘瘡は良い病で、痘痕の多い女が美人とされて居たからである。治療には煎劑、泥劑、ウムシュラーグ、マッサーヂを行ひ、外科的手術には刀劍を用ひた。ハムラビー Chamu-rapi od Hammurapi の法典（西暦前二二五〇年）に依れば、醫者の手術不成績に終る時は其の手を斬り、乳母にして其の乳兒を掏り替れば乳房を切除すと。

ナイル河畔の埃及人に關しては西暦前三千年來の確なる記錄がある。考方及方法には大なる相違を認めぬ。Isis は醫者の神で同時に女の神であり、Inhutep は半分人間の神である。即この神はバビロンの魔に相當する。バビルス Papyrus 特にバビルス、エベルス P.Eberus（原本はライプチヒ大學にあり）は西暦前一五五〇年の著書なるも内容は甚古い。其他四五種のバビルスあれど多くは處方の記載に過ぎぬ。エジプト人の考に依れば靈魂は人の體内に宿り、人死すれば天に昇り後二千年を經て再び天より歸來する。故に屍體を保存し魂をして所を得せしめたならば現世に再生が叶ふと云ふので、バルサムにより屍體を木乃伊に作り、金字塔（ピラミド）の中に安置する習慣があつた。解剖學の知識も大に進み、手術の如きもバビロンを凌駕して居た。眼科の處方に關しては記錄が多いから當時は眼疾が廣く流行して之に惱む者が多かつたに違ひ無い。

之等の事柄は希臘にも傳播して居る。即プノイマ（Pneuma）の學說は埃及輸入で基督後に Athmen と稱するに至つた。（印度のウエダ Weda は五千年前既に Asû＝Pneuma 即空氣と稱して居た）

現今泰西の醫學はユダヤの方に來たイスラエル民族系統の物らしく、モーゼの法典でもわかり、又舊

約全書にも衛生、醫術、殊に癩病に關しては詳細の記載がある（舊約中の醫學に關しては Ebstein の單行本あり。）更に之が希臘を經由し今日の醫學に至る迄には次の樣な沿革がある。

第一期。西暦前一千年、神及レムール（Lemur）の信仰の時代で、アコー、バーラ、アルペンの三神を信じた。之等は顧へば治ると云ふ程度の神である。チロン（Chiron）なる神は治療をもした。アスクレピオス（Asklepios）はチロンの門人で歴史的には半神半人なるも、死後は全く神に祀られ醫者の祖とされて居る。アスクレピオスの娘は名をヒギエイア（健康の神）Hygieia と稱した。衛生 Hygiene の語原である。彼の醫術は不明なるも治療に長じ Tempelschlaf として寺院に宿泊する一種の轉地療法に依り病を治したと云ふ。

第二期。西暦前六世紀　此頃より廣く經驗を集め、漸くにして迷信を離れし醫學を生ずるに至つた。之は全く當時の自然哲學に基因する變化である。西暦前六四〇年ターレス Thales なる人が宇宙の四元素說を唱へた。當時は醫師で哲學者を兼ねし者多く、之をエムペドレクス（Empedolekus）と稱した。ターレスは耳の迷路を記載し、又耳目の感覺に關する學說を出し、ヒポクラテスも之を用ひた。

第三期。西暦前五世紀　ヒポクラテス（西暦前四七〇年生）時代である。ヒポクラテスの姓は甚多く大ヒポクラテスは第二世である。彼はコスで生れラリッサで死んだ。エムペドレクスが『風火水土は宇宙の四元素にして、夫々寒、暖、濕、乾の性あり』と云つたのを、ヒポクラテスは人間に應用した。即ち『人間は水と土より成り、此の兩者を結合するは風及火である。火は人體内の心臓に入り更に血管によりて體中を循り、人體の調和を保つ、此の調和破るれば病となる。』

人體の流動物に四種あり。

	成分	性	製造所
黄膽液	土	乾	肝臓
黑膽液	水	濕	脾臓
血液	火	暖	心臓
粘液	風	寒	腦

之等體液の調和宜しきを得ば Encrasia と云ひ、調和を失すれば Discrasia と云ふ。病は體液の不調和にて起り、自然の力に從へば癒る。即ち病は自然が治し、醫者は手當をするに過ぎぬと云つた。故に治療も自ら食餌療法、衛生的療法、藥物療法の三に限られて居る。

第四期。ヒポクラテス以後は久しく彼の說を墨守せる所謂敎理論者 Dogmatiker のみで、プラトンの哲學も何等影響する所無く、又アリストテレス出でゝ自然科學の研究に努め、人體の解剖に力を用ひたるも、其の言は遂に近世まで用ひらるゝに至らなかつた。

第五期。西暦前三世紀　アレキサンドリア時代。此頃には既に感覺の中樞は腦に存する事を知り、又神經と腱、動脈と靜脈の區別も出來て居た。且つ血管の中にはプノイマの外に血液ありと云つた。解剖は甚だ盛で、病理解剖すら行はれたが、久しきに亘り何等寄與する所が無かつたため、世人の信用を失ひ、西暦前二世紀より後二世紀まで四百年間は數多の經驗學派 Empiriker は解剖を否定し、臨床的の研究を奬勵したので、全力は臨床方面に集中せらるゝに至つた。此頃より希臘の隆昌は羅馬に移り、羅馬

の醫學を希臘に輸入する時代が來た。アスクレピアデス Asklepiades はデモクリットの哲學を基礎として元素說 Atomtheorie を立てた。曰く、『人間は元素より成る。元素は無數の小なる管を作り、此の管には感覺性があつて中を體液が循環する。故に此の體液が異常無く巡ればよい。』卽前の液體病理說に對する固體病理說である。門人テミソン Temison は彼の說を信じて主張した。後、方法學者 Methodiker を生ずるに至つた。曰く、『生活體の成分には緊張力及び弛緩力があつて、之れが異常なければ卽健康である』と。此の時チエルスス Celsus なる物知り Enzyklopädiker が現はれた。方法學者の言が淺薄で民心に投じないのを幸ひに、種々の說を出し、再びプノイマテイケルとして四元素の外にプノイマを擧げ、病は此の爲に起ると云ひ觸した。チエルススの說も充分ではなかつた。

西曆一、二世紀に折衷派 Eklektiker が勃興して來た。卽二世紀にガレヌス Galenus 出でてヒポクラテスと同樣の說を唱へた。曰く。『人間は四元素より成り、四種の體液中血液には四元素平等なるも、他の體液には量に於て或物が多過ぎる。故に其處にXなる何物かゝ存在しなければならぬ。之が靈氣であつて、腦に精神靈氣、心臟に生活靈氣、肝臟に自然靈氣がある。靈氣の建造及び排泄力に依つて生活が起り、之に異常あれば病が起る。故に稟質 Temperament を考へねばならぬ』と稱して稟質を四種に分つた。多血質、粘液質、膽汁質、神經質が卽ち之である。又治療には自然の力に反せぬ樣に原因的の適應症を考へた。

ガレヌスの死後十世紀まで、中世紀歐洲の醫學は殆ど無爲と稱す可きである。Abendland なる伊太利に於ても研究の見る可き物無く、學問は僅に僧の權力內に維持せられて居たが、八世紀後になり僧侶以外にも學校を興し醫學を授くる者を生ずるに至つた。伊太利サレルノの學校が最も有名である。當時は學林哲學（スコラ） 廣く世に行はれて、實驗觀察を廢し專ら冥想に耽るを事とした。之が煩鎖哲學である。

十世紀の末人文學派起り、Humanismus のベイコンはスドロラ哲學を排し、アルナルド Arnald は Authoritätsglaube を止めよと叫んだ。此の二人の影響で醫學の研究は再びヒポクラテス時代の自然の觀察に歸つた。之より後伊太利では十四世紀より解剖の流行を來し十五世紀にかけては、ヰンチ、ラファイエル、ミケランゼロ等輩出して解剖圖をも畫いた。

十五より十六世紀となりグーテンベルグの印刷術發明、コロンブスのアメリカ發見、ルーテルの宗敎改革、コペルニクスの地動說で世界を驚かしたが、醫學にも革命が解剖より初まつた。アンドレアルス ベザール Andreals Vesal は十六世紀の初に解剖を盛にし佛蘭西其他にも亦競ひ行はるゝに及び解剖學は玆に面目を一新するに至つた。パラチエルスス Paracersus 出でて處方の學も進んだ。解剖圖は十五世紀に出來たマグヌスフント Magnus Hunt の作に初まるも、其の內臟を見るに肝臟五葉に裂くるが故に人間の解剖圖ではない。十四世紀花園天皇の御代に出來た日本の解剖圖も殆ど大同小異で、ベザールの革命以前に於ける圖は何れも類似の物である。臨床の事に關してはパラチエルス出でゝ曰く。『人間は Microcosmus で體は土より成り、Archerus なる生活力ありて、組織を消費し又之を再生す』と。故に解剖の外に此の說が廣く世に行はれた。

十七世紀になつてはデスハルトの哲學と、ベイコンの經驗論が有力であつた爲に醫學の上にも進步を來した。解剖學の進步と共に生理學も自ら生じ、血液循環等も明になつた。又現今の顯微鏡をミッテル

ベルグの人ヤンソン Janson が發明した（一四九五年）。又 Jatrophysiker 或は Jatrochemiker として、多くの學者は醫學を物理學若ば化學のみで說明せんとして、長く爭論を續けたが、遂には何れも臨床經驗を主張するに至つた。其の後英國のモナード Monad の哲學現れ、一方醫學及自然科學も進んで來た。其の間に系統學派 Systematiker が生じてホフマン、スタル、ハルベル、エブルマイン等が簇出した。當時相並んで出たのはカレインの神經病理である。佛國では生活力學 Vitalismus 唱へられ精力が脾、殊に腺中にあると云つた。

十九世紀は觀察及實驗によつて進歩した。コルビサは病理解剖學派で臨床上の事及心臟の研究をした。レンネックは聽診法を始めマゲンデイは動物實驗卽實驗病理學を主張した。後ウイルヒョウ出でゝ細胞の病理解剖學を確立するに及び、醫學は未曾有の大飛躍を以て今日に及んだのである。

三、印度醫學史

印度の醫學史は、西洋ではサンスクリット語により、原本に就いて相當に研究されて居るが、支那譯に依る研究は少なく、多くは佛敎の經典に依つて居る。ラーゲル Rager の歷史、英人ワイス Wise の記載あるも共に多少の誤謬を免れない。

支那譯に依れば西暦前三千年、印度にはアリール人種が來た。之はユーフラト流域の人種と同一である。韓陀 Veda 殊に西暦前千五百年頃に出來た最古のリーグ、ベダ Rig Vede（埃及のバビルス、エベルスも同時代）に依れば、印度に於ても魔及神の信仰が主なる物で、治療はあつても全く經驗的に行はれ藥には草を用ひた。次にアイウル、ベーダ Ayur Veda が西暦前八世紀より後の三世紀間に出來た。當時印度では婆羅門 Brahma の信仰が盛であつた。佛敎が初めて出來たのは二百年後の事である。歷、山大王の印度遠征は西暦前二世紀である。

アイウルベーダの時代には有名なる醫者の傳記がある。アトレヤ Atreya は內科の祖、ススルタ Susuruta 外科の祖で共に西暦前六世紀の人である。（ヒポクラテスより二世紀昔）解剖の知識は一般に不充分で擧ぐる所は名稱と數のみである。ススルタの門人は解剖を行ひ、又衛生と食養生に詳しく、藥物學に關する知識も豐富であつた。就中注目に値するのは『內科、外科は鳥の兩翼の如し、分離す可からず』と云つて居る事である。

毒物學は蛇の毒に關係して居る。

外科は一般に進み、器械も進歩した物を用ひ、燒灼法もある。止血には冷却と壓迫の法を用ひた。怪我の危險なる人體の急所も知つて居た。腫瘍摘出、吐糞病の開腹術、又側方切開術に依る膀胱結石の摘出をなし。又造鼻術も旣に此頃より行はれて居た。

內科は極めて不充分で病の名稱は多いが、診斷症狀の記載はない。流行性熱病、赤痢、コレラの名稱も見ゐる。產科、眼科には多少の記載がある。

以上は西洋學者の調査と一致する事柄である。

支那に渡つた佛敎の經典を詳しく見れば、西暦前四百年からの思想がわかる。當時の印度哲學は六に

分たれて居る。僧佉 Sankya（數論）と稱し、此の哲學は支那譯大藏經の金七十論にある。卽西曆前四五世紀頃の考に依れば、『宇宙の本體を神我 Tursha と云ひ、之より自性 Traksti が出る。神我は目に見ゑぬ取留のない物で、之が物となり、目に見ゑる時は自性と云ふ。之より種々の物が出で身體が出來る。』と云つて居る。人間の生理を說く事如此であるから病は內、外、天、より起るとなし、依天苦、依外苦、依內苦の三に分類して居る。依內苦は風熱寒痰の不平等から起る。卽風熱寒痰は人體に場所があつて、臍より下は風、心臟より下は寒、同じく上は痰、風が增長すれば他の病を起す。依外苦は世人、禽獸、毒蛇により、依天苦は寒、暖、雨、雷等に依るものとして居る。以上は典型的な數論派の哲學で希臘の哲學とは趣を異にして居る。

西曆前四世紀の思想及病氣の說明は佛敎の興隆に伴ひ其の佛典に依り傳へられて居る。之には種々の本がある。支那譯大藏經にも三十餘種あつて、其の內佛自身の說かれた物は其の名の示す通りに、佛說佛醫經、佛說醫諭經、佛說胞胎敎等がある。菩薩の說いた物には金毘羅童子威德經、治病合藥經、佛弟子の說いた本で精しいのは修業道地經、仙人（外道にて婆羅門を指す）の說いた物には、迦葉仙人の醫女人經、小兒疾病經、療痔病經等がある。之等は西曆前四世紀より、紀元頃に至る間の、かなりに古い本である。

其の內容を考ふるに、醫者の專門を八部門に分ち、『八分醫方』と稱した。

一、諸瘡。　皮膚病　　二、首疾。　耳、目、頭の病。
三、身患。　內科　　四、鬼瘵。　惡魔のために起る病
五、亞揭陀藥。　解毒藥　　六、童子病。　胎內より初まり、十六歲までの病。
七、長年方。　性慾を長く保持させる法。　八、足身方。　衛生

病を生ずる原因に十ある。

一、久しく坐して飮食せぬ事。　二、惡い物を飮食する事。
三、憂愁。　四、疲勞。　五、淫佚。　六、立腹。
七、大便を忍ぶ事。　八、小便を忍ぶ事。
九、上風を制する事。　十、下風（放屁）を制する事。

橫死の原因に九種ある。（九橫經）

一、不應飯而飯。　食す可からずして食するを云ふ。
二、不量食。　食を節せざるを云ふ。
三、不習食。　食に習はざる物を食するを云ふ。
四、不出食。　食未だ消化せざるに食するを云ふ。
五、止熟。　大小便を强ひて制する事。
六、不持戒。　戒行を持たずして遂に世法にふるゝ事。
七、近惡知識。　惡友に近づくを云ふ。
八、入里不時。　時ならずして里井に入るを云ふ。
九、可避不避。　惡疫、狂犬等の避く可きを放過するを云ふ。

使用した藥の數もかなり多く、其の記載には李女耆域因緣經、李女耆婆經がある。

印度に梵志と云ふ富豪が居た。其の人の庭に突如として、李の木の枝間に小兒が立つて居た。卽李の木から生れ出たのである。梵志は之を李女と名附け、牛乳を以て育てた。此の兒が十五歲になつた時は、其の美天下に竝び無く、七人の國王が妃に望んだ。當時印度では妻を撰ぶには、先づ婿たらんとする者は其の女の面前で種々の藝を演じ、技の優れたる者が撰ばれる風習になつて居た。然るに此度は七人の國主が望んだので、後の禍を恐れ、特に別の方法を撰んだ。卽二階に李女を置き、之を奪つた者に與ゐる事とした。毘沙王が之を得たので、梵志は李女の產んだ子が男ならば與ゐ、女ならば貰はんと約束した。生れた子は男であつた。片手には藥を、他の手には針を持つて居た。耆婆と名づけた耆婆長じて八年の時正妃が王子を產んだので其の子に位を讓り、己は國手賓迦羅に就いて醫術を學んだ。

或時耆婆が王城の前で一兒の薪を負ふて行くのに遇つた。五臟六腑が見ゐるので其の薪を『藥王樹』と名づけ、之を携ゐて人を診た。或時は腦の中を見て蟲を取り、肝臟の倒位を復して膏藥を貼り、鼻の孔に藥を注ぎ、或は長く病氣に苦んで居る王子の腹を刀で破り、傷を處置して藥を塗つた。

四、支那醫學史

支那三王の一なる神農は西暦前三千七百年旣に藥草を發見した。（現今の神農本草は僞本）黃帝 Hoa-ti（西暦前二五六―二五九〇）は醫者の法の發明者で、門人に素問、靈樞なる二冊の本を書かせた。現今流布せる本は僞作なれども、歷史上には尙價値の多い物である。何となれば秦の始皇も醫書のみは坑にしなかつたので、西暦前百五十年（アレキサンドリア全盛時代）頃の古い記載として殘つて居るから。

哲學は西洋と異り陰陽五行を本として居る。希臘の四元素が風、土、火、水なるに對し、印度では數論學派の五大は空、風、土、火、水、佛敎の四大は風、土、火、水である。故に印度では歷山大王が來る前までは五大で、後希臘と同じく四大となつた。然し支那の五行は印度の五大を採用したのではない。卽ち木、火、土、金、水で、更に之に陰陽の性を附し、有力なるは陽、無力なるは陰 aktiv なるは陽、passiv なるは陰、男は陽、女は陰として居る。五臟卽ち肝、腎、肺、心、脾は木、火、土、金、水に配當した。この考はヒポクラテスの本にもこれ程詳くはない。骨及び筋の數を擧げ、更に經絡を考ゐ、『中にはブノイマあり。之に榮、衞の二種を區別し、孔穴三百六十五あり。そこに穴を穿てば中よりブノイマ出づ。死すれば解剖して見る可し』と記してある。故に解剖は曖昧のものに違ひないが、記載は詳細を極めて居る。

扁鵲なる醫者西暦前六六〇年頃に難經を著し脈の事を精しく書いたが此の本は信ずるに足らぬ。漢の高后年間（西暦前一八〇年）には大倉公が居た。以上二人は共に有名である。

西暦二一七年後漢の建安二十二年に傳染病が流行した。大守張機は之を憂ひ、種々の本に就き傳染病治療の研究を始めて、傷害卒病論を著した。張機字は仲景、彼に依り治療の術が明になつたので、ヒポクラテスに比し、中興の祖と云つて居る。（ガーレンの死後七年、神功皇后出征後十七年目である）之

は熱病の治療法なるも、無熱の病の治療には金匱方論を出した。

之等の考は全く哲學に依つた物で、『熱の病には陰陽二種あり。陰は症狀内にあり、熱は毒の爲に起り、毒の度に應じて熱に高低あり、又毒の入れる通路、即消化管、血管、神經によりても異なる。故に治療も之に對抗する毒を與ふれば宜い』と云ふので發汗、吐、下を行ひ、後に體を養ふを『和』と稱し此の四を治療の法則とした。

治療に關しては藥の外には何の方法も書いてはない。現行の傷寒論は後人が筆を加へた物である。支那の宋及晉の時代には學者の跋扈が甚しかつた爲め、彼等を籠絡する手段として、本の餘計なる校正をなさしめた結果である。張仲景の沒後支那の醫學は進み、前宋の四四三年頃には醫者の大學を置いた。

隨の時代に巢元方が勅を奉じて書いた病原候論は名著である。病の症狀が分類されて居て、病氣に屬する物も、屬せない物をも纏めて書いた觀察の記錄である。西暦六一〇年で相當に古い本と云つて良い。之れに消渴。渴いて止まず、小便多くして甘く、疔が出來ると書いてある。即現今の糖尿病で、足利時代に間違ゐて、婦人の淋病に變つた。癩病。毛髮の病。寄生蟲病。の事も載せてある。疥癬の蟲は針をやれば見ゐるとあり、即蛆(ミルベ)を發見したのである。此の本は訂正も少く、議論も多くない。

唐高祖時代（西暦七世紀）に孫思邈(バク)は千金方三十卷を著し、醫學の各科に亘つて治療の方法を明にした。百年の後王燾は外台秘要方四十卷を出し内科、外科を記載した。以上の三種が隨唐の時代を代表して居る。

宋の時代には醫學の思想が變り、病の分類は病原候論に依つたが、論說は性理の哲學に依り、治療は政府の著した和劑局方が主として用ひらるゝに至つた。

金の時代には此の傾向一層顯著となつて、次の二大家を出した。劉守眞は素問にある自然療加の方をとり、『病は五運六氣卽自然の變化によりて起る、故に陰陽五行で說明されねばならぬ』と考ゐた。性理の哲學は宋時代にまとまつた學說である。『太極が宇宙の本で、太極が動けば陽、太極靜なれば陰である。太極の變化に依り木火土金水の五行生じ、之が都合よく行はるれば總てが順調に行く。木は春、火は夏、金は秋、水は冬で、土は四季を通じて在る。故に陰陽宜しく結合し、五行圓滑に運行せば、四季の時節の外、總ての事が順調に行く。』陰陽五行より出た物は氣である。希臘の哲學に比すれば太極は理(ウユーセン)であり、陰陽五行は現象(エルシヤイスング)と說明する故に考方は甚だ似て居る。『天地の間には只陰陽五行あるのみである。見ゐぬ太極より陰陽五行が出た時に之が見ゐて來る。人體に出れば女は陰、男は陽、事柄に出れば陰は惡、陽は善、行に來れば仁義禮智信となる。』『又火には二種ある。君火は人火であり、相火は天火である。後者は物を生ずるから動くが常、人間も動くのが常であり、之は相火のためである。』火を除いた他の五行は皆一つである。

此の解譯は十二世紀より十四世紀に亘つて行はれ、二世紀遲れて出でたバラチェルズスの、宇宙はマクロコスムス、人間はミクロコスムスと云ふ考方と同一である。

隨唐の醫學は素問に依るも張仲景は實際を主として哲を云はず、千金方になつても同じである。張子和は劉守眞を祖述した。

元の時代となり李東垣は考を進め、彼の主張は世人の意表に出でたのである。曰く。『病は外傷のみではない、風寒邪の外に過度の喜悅、及立腹でも起れば、飲食の度を失つても起る。故に內傷が無ければならぬ。食物は胃の中で胃氣を作る。五臟は胃氣で養はれる。故に胃を損じ其の成生を妨くれば病が起る。之を內傷と云ふ。胃氣の外に元氣、穀氣等あるが、胃最も肝要なれば脾胃を丈夫にして元氣を働かせねばならぬ。』此考に依り外傷の外に內傷を重要視し、脾胃を强健にする事が治療の方針となつた。

西暦十四世紀に朱丹溪は總ての人の考を綜合して曰く。『陽は人體に餘り、陰は人體に不足して居る。又氣は餘つて、血は足りぬ。從つて柔い物を用ひて人體をよく整ゐる樣に計らねばならぬ。故に補益卽榮養の療法が大切である。』此の說で用ひられた藥が人蔘である。以上劉、張、李、朱の四大家が代表的で、金、元以後は上の說が行はれたのみで、何等の發達をも遂げなかつた。

著述としては太元年間（一三〇八）に王與が無寃錄（法醫の書）を著はし、又洗寃錄、平寃錄等も出でた。後、衛生寶鑑、醫書太全等著はされた、之等の本は朝鮮を經て日本に渡り種々の訂正を加ゐられた結果、支那本國に於けるとは趣を異にして來た。

五、日本醫學史

一　太古の醫學

純學問的に見れば古事記、日本書記による神代の歷史は、今一般に考へられてゐる程古い時代ではない。

醫者の先祖は大穴牟遲命（大巳貴命）及び少名毘古那命（少彥名命）である。此の二人は天下を經營し、靑人草を治めた。大牟穴遲命は素戔嗚尊六世の孫である。出雲の國で飯を喰つて居ると人聲がして白蘞の小船が現はれた。中より鵠の羽を纏ふた小男が出て來たので、掌に乘せると跳つて其の頰を嚙んだ。高皇產靈神が曰はれるには『千五百の子供の內で惡くて手に終ゐぬ子が一人、指の間から漏れた、多分其の子であらう、よく養へ』と。恐らく朝鮮あたりから來た小男で、之れが少名那古毘命である。大穴牟遲命は大國主神である。後に此神を大黑とし少名毘古那を夷（外國人の意味で）と名づけたるも之は附會の說で歷史には無い。大黑は度印の摩訶伽羅天神と稱する軍の神である。此の二人は醫術を始めたが、アスクレピオスに似て極めて高德の人であつたので醫者の神に祀られた。

當時の醫學は西洋の古い醫學に比すれば遙かに進み、病は幽事卽吾人に見ゐぬ力が病を起す、故に神氣と稱し、更に平安朝時代に物氣に變つた。（此の考は西洋人にも野蠻人にもある。）此の氣に逆らへば人間は生者死者の別なく病を起す。神には荒ぶる神と、和かな神の二種がある、同樣に人間の精神にも荒魂、和魂なる物がある。神氣の外に、人の軀に毒があつても病が起る。伊弉冉尊が先に廻られたが陰陽の理に違ふと云ふので巡り直された。其の時に出が天の柱を廻る時に、伊弉冉尊が先に廻られたが陰陽の理に違ふと云ふので巡り直された。其の時に出來た子は蛭兒と云つて三年も足が立てなかつたと云ふ。卽ち行爲正しからざれば病となる。支那の後漢書の東夷列傳には『梳らず、沐浴せず、肉を食せず、婦人に近づかず、之を持衰と云ふ。持衰を愼まざ

れは病を起す、故に人病めば品行宜しからずとして之を殺した』と書いてある。魏誌の倭人傳にも書いてある。卽ち自分の體を愼まなければ病となる。荒ぶる神の所爲でも無く、自ら起る物であり、又偶然にも起る。

伊弉冉尊が火の神を產まれる時に高熱を發し、又嘔吐を催された。又素戔嗚尊は天照大神の座の下に大便をされた。姉神はそれと知らずに坐られたので、病氣に罹られた。之を以てしても疾病に關する考が綿密を極め、且つ年代の淺い事がわかる。

治療も詳しい。

祈禱　西洋各國共に行ふが、日本のは面白い。病あれば占合をした。卽ち鹿の肩骨に字を書き、樺の木を以て之を燒き、其の粉の狀態に依つて判斷した後、歌舞を催して神の氣を和らげた。

禁厭　言葉及品物を以て行つた。現今まで殘つて居る鎭魂とは體に病氣を起した時に、出て居る魂を元に呼び返し、又弱れる働を强める爲に行ふ。鎭火は火傷、疫病を癒す爲に行ふ。之に用ふる藥は匏、川菜其他合計四種の草である。藥物の內用は酒から初めた。平田篤胤に依れば藥は奇し(妙)より起り、術が不思議と云ふ時に奇しが藥に訛つたもので、此の感じは附けた藥が主として引起すから、古の藥は只貼附するのみで內用は支那輸入と云つて居るが、之は間違である。兎に角藥を內服した事は確である。

外科　怪我を治した、刀もあり針もあつたが、縫ひしや否やは不明である。皮を剝がれた稻羽の兎は蒲黃で癒り。同じ八十神達に火傷を負はされた大國主命は蚿貝比賣及蛤貝比賣の介抱に依り貝を摺り潰した汁で全快した。砥石と云ふ石造の針があつた事も確で、之は支那へも傳つて居る。

產科　產をする家は別に造り、終れば之を燒却した。

兒科　產兒の臍帶は竹の篦で切つた。耳鼻に關する記錄は無い。

藥物　暢草と云ふ本があつて、藥名が誌されて居る。甘草(甘木)人參(にこた)厚朴(ほほかしは)大黃、巴豆等を用ひた。又葛、蘆、薄、柊、桃、樺、酸漿、檜、榊、葡萄、蒲、竹、鷄、千鳥、鴨、翠鳥、兎、猪、鷺、墓等もあげてある。

水治法　盛に用ひた。支那の本にも『日本には病に罹りても藥無く只海岸に至り潮を浴びて四方を拜む』と書いてある。禊の事である。溫泉古くからある。大穴牟遲命が少毘古那命と二人で道後の湯に入つたと書いてある。灸及按摩は支那より傳來したものらしい。

伊弉諾、伊弉冉尊より鸕鷀草葺不合尊までを歷史上神代とされて居るけれども、神武天皇より開化天皇までは神人無別の時代であるから此の間も神代時代である。開化天皇の時に神人分離し、神のみ諸方に分れ、人間の王は宮城に殘る事となつた。

以上を總括して、西洋、印度、支那に比較するに日本に於ける思想は全く哲學的分子を缺ぎ、純經驗的でヒポクラテス醫學の觀を呈して居る。

二　奈良朝以前の醫學

崇神天皇より文武天皇の朝に至る間である。開化天皇の時に神人別となつて間もなく朝鮮より醫學が來た。又公に醫者を朝鮮より招聘したのも此の時代である。應神天皇の時に論語、千字本が傳はり、孝靈

天皇の時に徐福が仙藥を求めて日本で客死したが本を傳へたか否かは不明である。

充恭―欽明天皇の時代（西暦五、六世紀）に支那の書を朝鮮より移入した。之は醫書に限らず他の工業品其他技師等も居た。故に當時醫學で有名な者は皆朝鮮人である。歴史に依れば雄略天皇の夏四月、賤織工女（しやたこうじよ）或男と姦通して妊娠したと云ふ寃罪を受けたので、五十鈴川に身を投じて死んだ。腹を開いて檢すれば、水と石が出たので寃罪である事が判つた。

後、日本人も支那に行き勉強するに至つた。孝德天皇（西暦六四五年）の時に大化と云ふ年號が出來た。

儒教は佛教よりも早く傳はり、半は道德であり半は宗教で、而も勸善懲惡を唱へたために、以前の思想と衝突する憂は無かつた。然るに佛教は純然たる宗教で過去未來を說き甚だ人心を動かした。

敏達天皇の時、蘇我馬子が病氣で困るから、佛の力で治し度いと願つたので、朝廷よりは尼三人を下賜された。用明天皇御不例の時は、厩戸皇子（聖德太子）が看病せられた。此の時より佛に祈る風習を生じ、又僧で病の治療をする者も增して來た。

奈良朝以前の人々は纏つた思想なく。朧氣ながら印度、支那の醫學を知るに及び、經驗的であつた治療が哲學味を帶ぶるに至つた。後には留學生の歸朝により直接に支那の醫學を輸入し、同時に支那人、印度人も渡來した。

文武天皇の大寶元年に唐の大典に則り、律六卷、令十一卷の法律が制定せられた。其の內に醫疾令がある。散佚せるも幸に他の本に引用せる物に依れば、醫學の教育に一定の法律を設け、專門によつて醫者を分ち、修業する人數及期間を次の如く定めて居る。

體療（內科）	十人	修業期間	七ヶ年
創腫（外科）	三人	同	五ヶ年
少小（小兒科）	二人	同	五ヶ年
耳目口齒	一人	同	四ヶ年

一定の教科書を用ひ、博士が毎月一回試驗をした。卒業試驗は宮內大臣が行ひ、獨修した者と雖も檢定試驗を受ける事が出來た、外に大學があつて宮內省には屬せず。又大學の外に地方には國學があつた。規則としては細い事があつた。

其他に女醫、按摩、鍼、呪禁（じゅごん）等があつて、女醫は宮內省役人の下女で、年齡十五歲より二十五歲に至るまでの智惠ある女三十人を選び、產難とて產婆の仕事の外、看護婦、女醫の仕事を修得せしめた。醫者にして治療に秀でたる者には苗字、絹、田地等を與へて奬勵をした。

三　奈良朝の醫學　（西暦七一〇――七七一年）

大和の奈良に帝都があつた時代で、佛教隆昌を極め醫學と佛教は合して、僧侶が醫術を行ひ、醫者專門の僧も居て、聖武天皇御病氣の時は百六十五人の醫者が介抱をした。之には法律が出て其の監督をした。僧醫の成績は良好であつたが、僧尼は却つて風儀を亂した。

佛教興隆の結果、慈悲の心を疾病に向け、天平二年に施藥院（やくいん）（施は讀まず）が出來た。光明皇后の設立せられたのが最上の物であつた。其他悲田院、敬田院、療病院、施療院が奈良の興福寺、大阪の天王

寺に出來た。敬田院には僧呂を。悲田院には乞食を收容した。療病院では病人を治し、施藥院では貧民患者に施藥をした。

孝謙天皇の天平八年に印刷が初められた。グーテンベルグの印刷よりは千年も古い。醫學の印刷は室町時代に初められた。此の時代の病理學は萬葉集に出て居る。天平五年に腦良が病を得て落膽した時の文章は長い。然し、支那醫學を引用して居る。

四　平安朝の醫學　（西暦七八〇——一一八四年）

桓武天皇より鎌倉時代まで四百年間で、支那摸倣の巧になつた時代である。平成天皇の大同三年に大同類聚法が出來た。之は國造、縣主及大小の神社、土地の名族舊家に命じて家傳の藥方を献上せしめ、分類して百卷に纒めたものである。現今傳つて居るのは萬葉假名を用ひた鎌倉時代の文である。德川時代に出來た日本後記の出雲廣貞、安部眞直の大同類聚法上表文を見ると全く唐時代の文章である。卽文章が全然異つて居るから、傳つて居るのは僞本である。

藥の所に、加母は加賀の國より出づと書いてあるが、加賀の國となつたのは弘仁十四年で、當時は越前國加賀郡である。尿の色の說明に茶の如しと書いてある。元來茶は嵯峨天皇の時に來た物で斯樣に早く廣まる筈はない。又其の頃の茶は藥で、之が一度廢絕し、室町時代に盛に飲用に供する樣になつた。現今の茶は鎌倉時代に栽培した物である。故に鎌倉時代以後の僞筆である。此の本にある風邪は現今の風邪と變りが無い。然るに平安朝時代の風邪は神經病である。又、山草類と云ふ事が出て居る。本草より山草を分けたのは明の本草綱目以外には無い。日本には慶長十一年林羅山の時に傳つたのである。故に平安朝卽宋の時代にわかる筈は無い。內容は千金方で之を小さく分ち百卷とした物である。要するに大同類聚法は漢文でなければならぬ。

出雲本等は本居宣長に依れば室町時代若くば北條氏執權時代の物で、此の名を附して公に出版したのは德川の初、本草綱目を見てより後の事と云はれて居る。

延曆十八年（前著書より十年早く）和氣廣世は藥經太素を著した。唐文の確なる本で德川の中頃に出て來た。

次に更に名高いのは菅原峰嗣の金蘭方である。德川時代に出版されたが、之は足利時代の僞作で役に立たぬ。

圓融天皇天元五年に丹波安賴が醫心方三十卷を書いた。時代は少し遲れるも信ずるに足る本である。內容は大體の治療、鍼灸各科、衛生、食養生等で隨唐時代の有名なる書物を網羅し、其の文獻も書いてある。藥名の中に底野迦（テリヤク）唐とあるは支那より來た意味で、希臘で出來た Theriak と云ふ萬病の解毒藥が日本にも來て居る（奈良朝時代）。支那では昔より『房內』なる語がある。Sexuale Hygiene を意味し第二十八卷がこれで交接の方法が論じてある。此の本に依り平安朝時代の醫學が經つて來た。

醫心方の歷史に關しては面白い話がある。天元五年に此の本が完成せられたので朝廷へ献上したら、直に御嘉納になつて、試驗の敎科書として朝廷の文庫に收められ、世間では見る事が出來なかつた。其後源平の兵燹、足利時代の火災も免れて、室町時代に正親町天皇が之を典藥頭半井某に下賜せられた。

後半井は京都より江戸に招かれ、德川の醫者の頭になり、醫者の任免をした。然し彼の家に傳はつた醫心方は誰にも見せなかつた。寛政の頃德川が醫學館を作り、之を大學に昇格せしめた時に、醫心方を見せて貰ひ度いとて幕命に依り出させんとした。火事で燒失したと答へて出さなかつたので、更に『かく大切なる本を燒いて何故屆けぬか』とて幕府より罰せられた。故に京都仁和寺の文庫にある副本を直ぐに借りて見たが二十卷で十卷足りなかつた。後四十年を經過して、次代の瀧と云ふ人が醫學館の總理に任せられた時に、半井家の親戚の一人が脚氣に罹り重態となつたので、醫心方に之の治療が書いてあるから、それを見れば治ると瀧が云つたら、脚氣を記載した第十八卷のみを出して來た。二十年の後副本だと稱して全部を半井家から見せたので、幕府は大金を投じ、原字其儘の版にした。故に醫心方は官版であり、其の書體は六朝風（弘法大師時代）である。木版は今も尙東京帝大の倉庫に置き古してある。

醫心方に依り當時の醫學の模樣を見るに、初に千金方を引いて唐時代の思想を說き、支那の醫學を經めて居る。印度の醫學も說き、之には金光明最勝王經が採つてある。此の內に除病品があつて、『病は四大の不調和に依る。之を癒すには八術（八の專門）をよくし、又夢を調ふれば病氣發生の違ひもわかる。治療には藥を用ふ。』と書いてある。南海寄歸傳なる本も引用してある。

解剖及生理は粗末なる物で完骨、枕骨其他外表より知り得る骨のみが記載してある。脊椎の數は二十一箇で、五臟六腑には變りは無い。又經絡を說き、之が體の內と外とを巡り、六百六十の孔穴あり（數は時代により異る）と云つて居る。卽ち生理も同樣に粗末である。

病理　素問、靈樞及千金方と同じく外邪と內傷を說き內傷の模樣は四大不調に重きを置いて居る。

內科　體療とて唐の制度に從つた名である。——支那周時代には疾醫（內科）瘍醫（外科）食醫（衛生）の三に分けた。——足利室町時代に本道と名づけ、近頃まで行はれた。

外科　創腑と稱せられ、外科の名は室町時代に本道に對して附せられたのである。仁明天皇の時代に大村直福吉が治療記とて外科の本を出した。內容不明なるも、他の書に比するに藥を用ひしに過ぎぬ。醫心方に依れば止血には石灰、牡蠣末、石膏末を散布し、又艾の葉を揉んで貼り、古い布で繃帶した。金瘡にて腸出れば桑の皮で腹壁を縫ひ、上に蒲黃の粉を撒布した。金創の病人は絕對安靜にし、火傷に對しては藥の種類が多かつた。大なる開腹術は無い。

婦人科　支那でも元の時代以後でなければ專門科は無い。然し婦人病の事は別に書いてある。產及胎兒の位置に關しても記載がある。一箇月の胎兒を始形、二箇月のを始膏、三箇月のを始胎と云ふ。三箇月までは形が決まらぬ。故に母親の見聞した物により胎兒の形が變る。四箇月目に血管が出來る。之は古い印度の說で修行道地經の中にあつて、圖も附いて居る。

小兒科　大寶律令にあるも別に專門があつた譯ではないらしい。目、耳、口も同樣である。

鍼灸　他の醫者と並び立つて居た。丹波安賴は其の博士である。

按摩　名は出て居る。支那にはあつた。

藥物　藥經太素、新修本草（支那）深根輔仁の本草和名等の遺書があつて、藥の研究は最も進步して居た。

衛生　にも力を用ひられ、物部廣泉の攝養要譯二十卷（現今には傳らず）が出て居る。安德天皇の時

代に僧蓮基の長生療養方が單行本として出た。塙保己一の續文聚類集の中にもある。

呪禁　迷信と醫學との境界に置かれた物で猛獸に冒されず、又火傷、及傷を受けない爲に行はれた。

此の外に貝平親王の弘決外典鈔。丹波雅忠の醫略鈔、神遺方三卷、藥經大素等殘るも、此の時代の研究には醫心方で充分である。

五　鎌倉時代の醫學

此の頃になると漢文も減じ、東鑑の樣に文章の日本化と共に、醫學の內容も次第に日本化して、我國の實驗及思想が出て居る。

源實朝が病氣で苦んで居る時、建仁寺を建立した禪宗の僧榮西が診て、之は二日酔だからとて藥として茶を出し、之を讀めとて喫茶養生記を與へた。又桑も同時に與へたので、二日酔は治つた。此の本には印度と支那を搗き混ぜた樣な病理が出て居る。

丹波行長は衛生秘要鈔を作つた。現今の『衛生』は長與氏の命名した名である。

惟宗具俊の醫談抄なる隨筆もあり、又惟宗時俊は醫家千字本を作つた。

此の時代に論據とした本は三因方である。其の論說は少しく趣を異にし、病の原因を內因、外因、不內外因に分ち、內因は臟腑より起つて症狀の外に現はるゝ物、外因は經絡より起つて臟腑に病の及ぶもの、不內外因は中毒、外傷、飲食によつて起る物を云ふ。

此の說は金、元、及び宋の醫學に依る、故に五運六氣である。五運は木、火、土、金、水卽現象であつて、其の本質は太極である。六氣とは循環せる五運より表はれる君火、相火、濕土、燥金、寒水、風木で略して運氣と云ふ。五運は過、不足あつてはいかぬ。六氣は上下する故に逆行しても宜しくない。故に運氣論では虛實を八釜しく云ひ、五運六氣がうまく運行する樣にし、補瀉と云ふ方法で治療をした。

鎌倉時代には文化が日本化せる外に、日本的の佛敎を生じ其の考が亦醫學に應用せらるゝに至つた。

佛敎では病を六種に分ち、四大不調、飲食不調、坐禪不調、業病、魔病、鬼病とした。四大、飲食の不調は醫者之を癒し、坐禪不調は坐禪に依り、業病は罪障懺悔に依り、魔病、鬼病は神呪で治した。業病には癩病を擧げ、平安朝時代には傳染病と見做して居た。

一つの大には百一の病があるから四大には四百四病となる。

當時の公卿は日記を書いた。其に依り實際の療治を見るに灸と湯治の外には何も無い。

出來物には水治が流行して、鎌倉時代の始に風呂が出來た。此の頃のは冷水を用ひ、湯を沸す方を浴湯と云つた。——秀吉の入つて居た風呂は殘つて居るが、湯を沸して外より入れる樣になつて居る。——

一方當時に於て風呂は宜しく無いと云ふ醫者も居た。

又禁好物なる物を揭げて、病氣に依り食して可なる物、不可なる物を區別した。（頓醫抄—梶原性全）

外科　支那から外科精義なる本が傳はつた爲に、初めて外科と云ふ名稱が出來た。論ずる所は癰疽Carbunkel のみで、烙針位は使用して居る。

產科　に至つては奇妙であつた。難產の時は借地文とて證文を書き產婦の室に貼つた。又法華經の湧

出品を讀んだ。之には地面より佛の出る所を書いてあるが爲である。卽迷信も一面には盛になつて來た。

聖德太子の療病院が出來て後、藤原時代には太宰府の續命院、出羽國の濟苦院等が出來た。

鎌倉時代には忍性なる僧が出た。彼は我國に類例のない實際的の宗敎家で、理窟を言はず、專ら戒律を嚴重にして之を實踐した。奈良の町の癩病患者を自ら擔いで癩人院に入れ治療をして居たが、後には鎌倉に行き、大佛の後の山に療病院を設け、二十年間に收容した患者の數は四萬六千八百人、內死亡者一萬人以上の多きに達した。又坂の下では馬の病院を作り治療を加へた。當時偶々鎌倉には日蓮が居て彼を罵倒したが、兎に角、彼は社會事業の上に於ては最も卓越した僧である。十年程前まで殘つて居た奈良坂の北山十八間戸は實に忍性が癩患者を收容した遺跡と云はれて居る。

六　室町時代の醫學

足利時代より七、八十年間は無事であつたが、應仁亂後は戰國の世となり、學校は殆ど廢絕して、漸くに金澤、足利の兩文庫が殘つた。かくて學問は僧侶に歸し、禪宗の僧のみが支那より學ぶに至つたので、僧の醫者を兼ぬる者多く、醫學は支那より歸朝した人々に依つて廣められた。竹田昌慶、田代三喜等が其の主なる者である。又支那人の來る者も多かつた。陳宗敬は博學の聞ゑ高き人で、承平二十四年（西曆一三六九年）に博多に來て居住し、外郎と號した。今も尙外郎透頂香と云ふ藥が殘つて居る。故に醫學は衰ゐぬのみか、却つて內容は充實して來た。

此の時代の著述には宋、有隣の著した福田方が代表的の物である。太平記第二十五卷に足利直義の妻の病氣の事が出て居るが、之にも種々の事柄が書いてある。福田方は假名文である。

關白一條兼好の作つた尺素往來には醫師の事が記されて居る。

同時代に五體身分集三卷が出來て殘つて居る。之には筑前香椎宮學頭生西之を校すと書いてある。

此の本にては人體を頭、首、眼、手、足等系統的に分類して居る外、名稱が多くは鳥目（やとりめ）、寸白（すはく）（條蟲）等の日本名を用ひて居る。

內科は田代三喜が支那に行き、李東垣、朱丹溪の醫學を持つて來た。此の人は鎌倉の人で、下野の古賀に居たから、古賀三喜とも云つた。德川時代になり隨唐の醫學を唱ゐ初めて來た。之れを古方派と云ひ、之に對して宋以後の李朱醫學を後世派と云つた。

外科は實際的になり、金創醫なる者が生じた。之は戰爭で多くの負傷者を出したため、病身の者及臆病の士が始めた。金創で取扱ふ物は出血するものに限る。產の場合にも血が出るから產科をも兼ねて居た。

婦人科は安藝守定が出て一派を立てた。其の內に泉州堺の阿佐井宗瑞が大永五年（西曆一五二八年）に醫書大全なる本を版にした。之が醫書出版の初めで、西洋で本を出版したのも此の時代である。

眼科は馬島淸眼僧都が初めて專門の一家をなした。

七　安土、桃山時代の醫學　（永祿十一年より五十年間）

織田、豐臣の時代である。戰國の世が統一され學問が京都に興つた時で、鐵砲、煙草等流行し、西洋

人も渡來して、大なる變動を來した。

醫學の系統も田代三喜の遺業を更に門弟の曲直瀨道三が大成し、天正二年に當時の說を纏めて啓廸集八卷を出した。時の天皇の天覽に供せしに、いたく嘉稱され、僧策元に命じて序文を書せしめられた。勅諭附で天下に頒分されたのは古今此の本のみである。

道三は李朱醫學を系統的に抄錄したので、特に獨創的の所は切紙として門人に書いて與へた。故に彼の著述は直筆の物が澤山殘つて居る。

後永田德本が出て、張仲景の學說を實踐した。彼は永く甲斐に居たので甲斐の德本とも云ふ。彼はヒポクラテスと同樣の事を云つて居る。『卽病は自然の働に依りて治る。古今の醫書多くは反古なり』と。故に彼の治療の方法は餘程相違して居て嗅ぎ藥等も出して居る。彼は馬に乘り、首には袋を吊し中に一服十八文の藥包を入れて行商をし、信州諏訪に到り百十八歲で歿した。

老人科　道三の啓廸集にある。

外科は前時代に引續き金創醫が跋扈して居たが、此の頃新に鷹取流外科が起つた。卽ち鷹取秀次之を始め、外科細塹、外療新明集なる二種の著述を出版した。

日本流の外科と稱せらるゝも、多少の日本的なる所を除けば、他は悉く支那醫學の燒直しで、外に南蠻の藥も用ひて居る。

彼の孫は養巴と云つて黑田侯に仕へた。

口腔科も出來て居た。之は口中科なる名稱で丹波兼康、同親康が初めた。

天文十三年にザヴィエル Xavier が鹿兒島を經て豐後に來り、西洋の思想を傳へた。彼を案內したのはボール、ド、サンタフェである。元は弓西と云ふ僧で、日本人を殺害して、ゴアに逃亡し、アンゲル後にサンタフェと稱し、洗禮を受けて居た。日本名は半次郎とも云ふ。

弘治三年に葡萄人アルメイダ Almeida は豐後で醫術を始め、癩病々院と育兒院の二を舟木に設けた。同年國主大友宗麟は耶蘇敎を信奉し、敎師の勸めに應じて救濟院を三箇所に建てた。後大內義隆が同敎に歸依するに及んで、サンタフェは山口に行き、同地で布敎に從事した。

京都に於ては信長が安土より出で、天下を支配するに方り困り果てたのは不遜なる延曆寺の僧であつた。彼は僧兵抑壓の目的を以て、エスイト派を招き、伊吹山に藥草を栽培せしめた。

伊吹艾の一部は此の時の殘りである。又永祿十一年には葡萄人に命じて、耶蘇敎の寺を建立せしめ之を年號に因んで永祿寺と稱した。然るに延曆寺の僧は大いに怒り、『寺名に年號を冠せしは延曆寺以外にある可からず』とて信長に迫り、遂に南蠻寺と改稱せしめた。

南蠻寺興廢記に依れば、ヤリイス、ケリコルなる二人を招き、寺中に病者を留め治療を施し、學問を敎へしめて居る。ヤリイス、ケリコルはケリコリヤ、ルイス Gregoria u Louis の誤である。此の二人は多くの門人を作つたが、天正十三年に太閤が南蠻寺を破壞したので、何れも離散して了つた。

僧惠春は癩瘡を病み、京都の眞葛ヶ原に起臥して居たが、南蠻寺に引取られ、二人の施療で回復したのを恩とし、梅庵と名を改めて其の宗旨に歸依し、布敎に從事し、醫術を施した。南蠻寺の破壞と共に行方不明となつた。

吳服屋安右衛門は梅毒を患ひ、東寺の廻廊に眠つて居たが、南蠻寺の收容する所となり、直ちに全治したので、宗門に歸し、名を告須蒙と改め說教に從事した。天正十三年の變後、泉州堺に逃れ、市橋庄助と稱して外科の治療に從事したが遂に發見されて磔に處せられた。

百姓善五郎は同じく東寺の廻廊より收容せられたが、兎唇が治つたのを德とし、名を壽門と改め、惠春と共に布敎に從事した。後島田清庵と稱し、醫業を始めたが、天正十六年九月、堺で捕はれ、市橋と同時に磔せられた。

慶友（本名をハフテイ）と云ふ葡人は初は長崎に居たが後大阪に移り、外科を開いた。

澤野中庵は天文の事を話し、其の著述を奉行所に納めた。後元祿年間（貝原益軒時代）に通辭西之を讀み、向井元升之を譯して乾坤辨說と命名した。然るに洋文の等なる澤野の書は羅馬字の日本文であつた。

彼は太平記を讀み、或は日本の辭典を作り、日本に居住する事が三十年にも及んだので自由に日本語を話し、切支丹では無いと宣言して居た。彼の實名は Christophan Fereira と稱し、著書には中、庵外療書がある。

南蠻流醫學の學說はヒポクラテス、ガーレンの記載と同一で『人間にはウモル Humor と云ふ血の名四つあり、一にはサンギ Sanguis 二にはコレラ Cholera 三にはくレマ Phlegma 四にはマレンコンヤ、Melancholia 之なり。サンギと云ふは能血のことなり、性は熱にして温なり、コレラと云ふは血の上澄、薄血なり、性は熱にして燥なり、ヘレマと云ふは血の內にある水なり、性は寒にして濕なり、濕痰の腫物はこれより發る。マレンコンヤと云ふは血のおりなり、性は寒にして燥なり。云々。』等ガーレンの液體病理說を說いて居る。

八　德川時代の醫學

イ、支那系統の醫學

李東垣、朱丹溪の所謂李、朱醫學は曲直瀨道三に依り主張せられ、二代目の曲直瀨玄朔が後繼者である。

玄朔は初代道三の妹の子で、豐臣秀次の侍醫となり、秀次自殺するに及び、常陸の國に流罪に處せられた。後陽成天皇の御病氣を拜診するに方り、赦されて京都に歸り塾を開く。之より曲直瀨の學風は天下に行はるゝに至つた。後、彼は幕府に招抱へられて、名を今大路道三と改め、幕府瓦解の曉に至るまで、代々醫者の任免を掌つた。彼には岡本玄治以下著名の門人多く、又著書も種々出して居る。

明暦より寛文の時代となり、饗庭東庵を中心として劉守眞の說が擡頭して來た。此の學派を李朱の後世派に對し、後世別派と稱し、運氣論の醫學である。

彼等の間には多くの學者が居て、種々の著述をした。

就中最も世に聞えたのは岡本一抱である。

岡本一抱本姓は杉森。火氣論を盛に主張し、支那の醫書を假名文に和譯して出版した。諺解と稱し、著名の本は多く網羅して居る。

彼の兄は近松門左衛門である。一日近松に向ひ『餘り世間の役に立たぬ淨瑠璃は作らぬがよい』と云つた。近松は『自分の作は人命に關せぬが、お前の診解は人命に關るから止めよ』と答へたので大いに悟る所があつて著述を中止したが、此の時には既に多くの仕事は終へて居た。

一抱は學殖頗る深く、其著書は名の示す樣に極めて通俗的であるが、獨特の意見を加ふる外に訂正、敷衍を行ひ稀に見る好著である。

德川時代の初に藤原惺窩、林羅山等出でて程朱の學を唱へ、廣く世に行はれた。

寛永の頃に中江藤樹は王陽明の學を唱へたが反響は強くなかつた。

寛文の初に伊藤仁齋古學を興し、思想は再び古き昔に歸らんとした。之と時を同うして、名古屋玄醫と云ふ人が出て、明の喩嘉言の著、傷寒尙論、醫門法律（醫者の methodik の本）を讀み、醫學の思想も古に歸り、張仲景の說を研究せねばならぬと主張し始めたが、永祿九年六十一歲で歿した。

彼の說に依れば、『百病は風、寒、濕の三より起るも、總括すれば寒に傷られて起る。衛氣（支那にて、人體中には衛氣と榮氣ありて、前者は脈管の外を、後者は脈管の內を環ると云ふ）の衰ふる事が其の原因となるから、衛氣を增す藥、卽ち湯熱の藥を用ふれば良い。』

ヒポクラテスの藥と同じく、藥の性を溫冷の二種に分けて居た。

陰陽虛實の哲學的な所は問はず、專ら現症に依り治療をした。此の考は張仲景に出るが故に、玄醫は之を古醫方と稱し、他を後世方と命名した。

歷史的には重大なる變動なるも、事實は之に反し、彼の考は天下を動かすに至らなかつた。

當時後藤艮山（こんざん）と云ふ人が居た。元は京都の士で役を罷め、丹波の山中に退居したが、支へ難い貧困の爲に遂に江戸に出で、大に家道を輓回した。此の時江戸には屢火災があつて、彼の家も七度襲はれ、家財を悉く烏有に歸したので再び京都に歸つた。職に窮し、『學者になれば伊藤仁齋、僧になれば道元の上を出でず、已むなくんば醫か。』と歎じて、名古屋玄醫に弟子たらんと志したが、束脩の金が足らぬので、門前拂ひを喰ひ、憤懣して『玄醫鼠輩人を知らず』と罵つて門を去り、自ら奮つて醫學を獨修した。彼の考は議論に富み、むしろ玄醫の醫學を大成した物と云つても良い。卽ち、『百病は一氣の留滯に起る。一氣とは元氣、元氣とは宇宙に存する一種靈妙の力である。』（李朱醫學の元氣は兩腎の間在つて、艮山の元氣とは意味を異にして居る。）

之を一氣留滯論と云ひ、爲に後藤流の一派を生ずるに至つた。

治療の實際を見るに、灸を甚だ多く用ひた。彼は昔の大なる灸を廢して、現今行はるゝ燒處（やいと）として、方々に小さく据ゑる灸を始めた。

又蕃椒の强い刺戟を利用して一氣の留滯を除き、元氣を振起する目的には熊の胃を用ひた。又溫泉を重要視した。以前の湯治は一種の道樂であつたが、彼は全く之を療法に用ひ、衆人擧つて攝津有馬の湯に赴くにも拘らず、艮山自らは態々但馬城の崎の湯に入り、之を推奬した。故に俗間彼を渾名して湯熊灸庵と呼んだ。要するに彼の醫術は理學的療法である。

艮山の門人香川修庵は師命に依り、伊藤仁齋に師事して古學を研究した。其他古學に並河天民等が居て儒醫一本を提唱し初めた。仁齋は之を批難したにも拘らず香川、並河は醫術を以て生計を營み、傍ら

に儒者をして居た。江戸の儒者は此の道を知らず、糊口に窮して諸侯に仕ふる者が多かつたが、京都の儒者は良く喰つて行つた。修庵は儒醫を一本にせんとして、一本堂と號し、一本堂行餘醫言廿四卷（內二卷散佚せり）を著し、支那の學說を集め、病の說明をした。又一本堂藥選なる藥物學書も作つた。當時我國には本草と稱する博物學の本があるに過ぎなかつた。

後藤艮山は氣宇の浩大な人物であつた。其の頃の醫者は剃髮を行ひ、朝廷に出入する者は法印、法眼等の僧位を貰ひ、全く僧侶の風を裝ふたが、一人艮山は直垂を著け、髮は束ね、足には一種の靴を穿ち、我國の醫者の風俗を定めた。

長崎にては向井元升が普通の着物に束髮の姿をしたが別に影響は無かつた。

廣島には吉益爲則（東洞と號す）と云ふ醫者が居た。田舍に居ては詰らぬ病人を取扱ふに過ぎぬ。京都に出て天下の醫者を治さねばならぬと稱し、三十七歲の時家族を引纏めて、同鄕の侍醫堀某を賴り、京都に上つた。堀の近くに開業をしたが誰も相手にしない。詮方なしに周助と稱して人形細工の職人となつた。――伏見人形である。――或る日仕上げの人形を持ち問屋に行つたら、家中が騷々しい。聞けば主人が病氣である。診せて貰いたいと申込んだ所が、見せても害はあるまいとて診る事を許された。主治醫の名を尋ねたところが山脇東洋とて宮內省屈指の侍醫であつた。吉益は『山脇先生なら間違は無い。先生が來られたならば之を渡して呉れ。』と云つて紙片を殘した。之には『藥に石膏は除け』と書いてあつた。山脇東洋は之を見て手を打ち感歎して彼を推賞したので、吉益の名は一時に京都に廣まつた。

彼は人形製造の間は勿論、厠中に於ても傷寒論を備付けて勉强し、後藤艮山と同じく醫學の復古を唱ゐた。後門人鶴元逸の名を借り、醫斷十九枚を著した。曰く、『人間の死生は天命で醫者の預る所では無い。醫者は病を治せば良い。病で死を致すは命では無い。元氣と云ふも之は天地の元氣で其の消長は人力の及ばぬ所である。李朱醫學にある經絡等は誣說で、經驗に依らぬ事は實際の役には立たぬ。萬病は唯一毒で、體に毒無ければ病は起らぬ。故に毒を以て毒を制すれば良い。毒を去れば良い。』從つて用ふる所は主として下劑、殊に巴豆等の峻下劑である。

李朱醫學では溫補と稱して人參を用ふるに反し、吉益は汗、吐、下の亂暴なる療治を始めし爲、診療を乞ふ者更に無く、人形のみでは四人の家族の扶養が出來なくなつた。愈々明日の食物に窮するに及び少名毘古那を祀れる五條の天神に參つて、談判を試み、『自分の論說惡しく、國家を害するならば、半死半生で苦しいから殺して呉れ。間違ひなければ喰へる樣にして呉れ。』と云つた。神樣は默つて居たが、村尾と稱する人が氣の毒に思ひ、佐倉侯の侍醫に推薦した。然し『自分は喰へなくとも說を抂げて五斗米に腰を折る事はしない。君は友達と信じて居たのに自分を知ら無い。知らぬ者を友として居たから醫斷を作る。』と云つて村尾と絕交した。

醫斷世に現はるるや、反對說盛に起り、畑醫學院は醫者の學校を作り人を敎ゐて居たが、斥醫斷を出して之れを反駁した。

吉益の門弟鶴元逸は正々堂々、辨醫斷を作つて斥醫斷、辨斥醫斷を攻擊し自說を主張して其の正否を爭ふた。以上は京都に於ける論爭である。

江戸にも同樣の反對者を出した。望月鹿門は上洛が叶はぬため、吉益が弟子の懇請に依り津輕に往診せし歸途を要して爭はんとしたが、吉益は之に應ぜず歸京の後に至つて公然反駁をした。

斥醫斷著れて四年目に、吉益は類聚集を自著した。飛ぶが如くにして一箇月中に一萬部を賣り盡し遂に數十萬部を出したので、一毒流の醫書は天下を風靡し、江戸も京都も反對者の影をひそむるに至つた。

吉益は餘りに大言壯語したので入門を見合せて歸つた人も多かつた。筑前の龜井南溟は其の一人である。

彼は巨眼炬の如く人を射たので、皆辟易して物も云へなかつたと云ふ。山師風の所があるけれ共熱心の爲である。『實際の役に立たぬ事は廢めよ、實驗せぬ事は一切捨てよ、死生は天地造化の働であるから、毒を去り病を治す樣にせよ。』と云つた。此の說は優柔不斷なる一般の學說を打破する爲に出でし物で、よく考ふれば缺點がある。

爲則の息子吉益南涯は氣、血、水辯を出し峻激なる父の說を溫和にした。『一毒體に入りて病を起す。體には氣血水ありて其處に毒現れ之に乘じて病生ず』と說いた。此考はガレヌスの說に類似して居る。然し其の當時はかゝる亂暴なる意見が良かつた。ストロラ哲學の如き學說に對する霹靂であつて、大いに世人を刺戟せしため多くの門人來り、漢醫學系統の間に漢蘭折衷の說を生ずるに至つた。

斯る間に望月等を主とする折衷學派が現はれた。此の內で特記す可きは多紀の一族であつて、四代續けて主腦を出し、江戸で大いに流行した。彼等は江戸の考證學派であつた。

其の時に方り加茂眞淵が國學を盛にしたので醫學も進み、三宅意安、太田見龍は『和方に依りて治療す可し』と唱へた。

和方とは神代以降、日本古來の醫療法を集めた物を云ひ、水戸の人佐藤方定の書奇魂に出て居る。

此間に種々の注目す可き出來事があつた。

黑川道祐　寬文二—三年（西曆一六六三）に本朝醫考を著し、人の傳及び歷代の醫者の事蹟を集めた。三冊半となる時、祖先を褒め又之を世間に發表せしは宜しからずとて直に發賣禁止となつた。

寺島良菴　大阪の醫者である。西曆一七一三年に和漢三才圖會八十卷を出した。又濟生寶五卷には醫者の事を誌した。前者は天地仁に分れ支那の三才圖書を模した一種の百科全書である。西洋では佛國以外には百科全書は無かつた。

小川笙船　享保年間に政治に關する請願が許されたので貧民の爲に病院を建言し、享保六年（西曆一七二一年）小石川に大規模の養生所を建て醫官を集めて貧民に施療した。

山村通庵　後藤艮山の門弟である。自宅に用ふる人工溫泉の法を考へ藥を調合して發賣した。

田村藍水　寶曆八年（西曆一七五八年）物產會を興し、植物を集め說明を附して陳列した。

多紀元孝　多紀の先祖である。自宅に學校を設け躋壽館と稱し、補習醫學としては百日敎授を行つた。後幕府の官立となり醫學館と改稱した。

池田瑞仙　痘瘡を研究し、痘科專門で幕府に抱にられた。之は戴曼公（獨立）と云ふ支那の禪僧が岩國に於て池田に傳へた物である。戴曼公は痘唇舌圖を著し唇舌に出る痘瘡及麻疹の症狀を詳しく記載して居る。

柘植龍洲　蔓難錄を著し蛔蟲の形態學及鑑別症狀等を詳しく述べて居る。

ロ、漢蘭折衷の醫學

漢蘭折衷派で有名な山脇東洋は後藤艮山の弟子である。支那の解剖圖を見るに如何にも事實で無い樣に思はれたので師の艮山に質した。艮山は『解て觀るに若くはない然し人體は法律の許さぬ所なれば獺でも已むを得ぬ。』と云つた。

漢書に依れば、昔支那では大醫尙方及び巧屠が罪人を解剖してをる。唐の世には揚介の存眞圖、鷗希範の五臟圖等の人體の解剖圖が出來た。我國に傳はつた物には華陀（名醫の名）內照圖、景岳內照圖等があつて唐代の圖を其の儘傳へて居る。

卽ち山脇東洋は獺を解剖するに全く見た所の圖と趣を異にして居るので、大いに奔走して、寶曆四年（一七五四年）に若狹の小杉玄適と共に遂に政府の許可を得て刑屍を解剖し其記事を臟志と名附けた。

粗末なる四枚の圖と簡單なる記事に過ぎないが、初めての寫生なれば當時の人は大いに驚いた。

佐野原泉は非臟志を出し、之を攻擊して俗人の意を迎へんとした。卽ち『醫者は治療をすれば足る。五臟六腑を解剖して何になるか。』と非難した。山脇は『先物實試をしなければ醫術は進步しない。』と辯じた。

山脇の門人永富獨嘯庵は專ら師の考の宣傳に努めたけれども不幸三十五歲で夭折した。氣骨に富み、婦人の樣な容姿に似合はぬ亂暴者で、世人の惡口『毒性』を其の儘に用ひて獨嘯庵と號した。彼の漫遊雜記は三十歲前の著述である。和蘭の醫學を長崎で研究し『西洋人は解剖で學說を樹てるから確だ。』と云つた。

東洋の次男山脇東門は永富と同年である。彼は三度解剖して逐一記錄に留めた。

東門、獨嘯庵の二人は和蘭醫學の刺絡の法を盛に述べた。『針は抑蘂針、箱抑蘂針あり。』等云つて居る。

少しく後に、荻野元凱は刺絡篇と稱する漢蘭折衷の本を著した。

賀川玄悅は西洋の說を活用する技倆は乏しかつたが、產科には西洋風の事が多い。江州の人で百姓を嫌ひ、京都一貫町に出で按摩と古金買ひで渡世をして居た。或時隣の家內が難產で胎兒が手を出したまゝ生れないのを氣の毒に思ひ、玄悅は暫く考へた末、提灯の柄の鐵鉤を引掛け頭を壞して子供を出した。之より產科の事に興味を覺へて產科醫となり、明和六年（西曆一七六九年）六十七歲の時に產論を著した。中には當時の人の考へ及ばなかつた多くの事が書いてある。例へば、

腹中の胎兒の位置は必ず頭は下に、顏は背に向ふ。

頭は柔で、出でゝ後膨れる。

產には足位回轉術、及鉤の使用を必要とする。

產後產椅を用ふる時は貧血を起す。

胎兒の位置惡き時は姙娠の末期に按摩をすれば可なり。

等云つて居る。兎に角之は空前の事である。

彼は文字に盲であつたので皆川淇園の手を借りて產論を出した。其の世に行はるゝに及び公開の席で

泪を流して彼に謝したと云ふ。

嘗て宮中の御産の拜診を仰出された。立合の時には醫案と稱する意見書を必要とした。宮中では殊に之が嚴重であつた。賀川は書けない。賀川曰く。『學問と實際は違ふ。醫案を書けといふなら自分には出來ない。手術を受けるなら……』とて直徑一寸長さ四、五寸の竹の筒を取り寄せ、其の筒穴より指二本を以て皿の饅頭二箇を收め一同を啞然たらしめた。即ち技術の精巧は推して知る可きである。

或女が産後貧血で大いに困り、彼を迎へたところが、金持であるから醫者を多勢呼んでゐた。賀川曰く。『各々方御苦勞だ。玄悅は草鞋に乘つて來たが指が一本觸るれば治る。各々方は駕籠に乘つて來たが病は治せぬ。』後『病は玄悅が治した。各々方惡るくしたら又云つておいでなさい。』と云つて歸つた。

彼は毎日時間を定めて診察をし、其の後は當時京都一貫町より本願寺の裏、島原の遊廓に近い田圃に乞食が多かつたので、米を運んで日課の樣に彼等に與へた。

彼の産論はシーボルドが長崎に於て、弟子美馬順藏をして獨文に飜譯せしめたので、姙婦のマッサーヂは世界的となつた。實に日本人にして醫學の著述に依り、獨逸の醫學社會に認められたのは彼を以て嚆矢となすのである。

玄悅の養子賀川子啓（玄廸）は産論翼を作り、柴野栗山が之を訂正した。之に依り産論に於ける手術研究の不足は補はれ、初めて賀川の考に基く所の姙娠圖が出た。

手術は秘傳に屬する爲に記載されて居らぬ。

之は三宅氏に依り早く獨逸に紹介された。

賀川玄悅の實子は才能優秀であつたが、繼母のために出奔し、玄廸が養子となつた。後四五代は大人物を輩出した。玄廸に有名なる弟子が二人居る。

奥劣齊　玄廸の弟子で、手術の方法を大成した。文政二年宮中で尿の出ない産婦にカテーテリスムスで尿を通じた。又足位回轉術を見事に行つて居た。

劣齊の門人水原三折は賀川、奥の論說手術に自己の考を加へ産育全書として出した。

片倉鶴陵　賀川玄廸の弟子。賀川の說及嶺春泰に譯せしめた所の和蘭の醫書に依り、産科發蒙を著した。

外科　は支那の外科正宗、外科精要に依るも膏藥を貼り、腫物を切るに止まり殆ど役に立たぬ。

華岡青洲　此の時出でて外科を盛にし、文久二年紀州侯に仕ひ、捨扶持を貰つて居たが、天保二年七十六歳で死亡した。彼は前人の爲さない事を爲し、又其の主張は『內外合一活物究理』である。即ち內外科は合して行ひ、又生物に就き實驗を行はねばいかぬと云つた。

彼は最も典型的の漢蘭折衷を行つて居る。又著述を好まず、著はす所は何れも門人の記載であるが、彼の事業なるは明白である。例へば、

鎖　肛　手術して切開した。

鎖　陰　之も手術した。

乳　癌　手術で剔出した。

痔瘻　患者が多いので器械を發明した。
脱疽　指にあつては切斷をした。
兎唇　手術をした。

魔醉術を要する故に魔醉藥を發明した。——支那では後漢の華陀が行つた——麻沸湯と稱し曼陀羅華、烏頭を主成分とするが故に一種の中毒を起し、手術後も久しく臥床せしめ、鹽、人參を與へて中毒の治療を施した。シムプソンのクロロフォルム、エーテルよりは餘程古い。

金瘡　にはバルサムを塗り、洗ふには燒酎を、ガーゼには茗茶、卵白を用ひた。
止血　には血管の押壓及局所結紮を施し。
針、繃帶　共に種々の物を用ひた。

以上はカスパルの外科書を見、更に自分の工夫を加へた物である。著述をせず自分の爲した事は隱した。

本間棗軒　華岡青洲の門人である。瘍科秘錄、續瘍科秘錄を著はし所々華岡の事に言及せる爲に破門されて水戸に歸り、暫くは江戸に出で日本橋に開業治療をして居たが、後水戸侯に仕ゐた。彼は華岡の手術の外に更に一層新しい事をして居る。膝關節の切斷。動脈結紮に依る動脈瘤の手術。會陰側切開術に依る膀胱結石の摘出等である。

華岡及本間の二人に依り漢蘭折衷は著しく進んだ。

眼科　著しい影響はない。柚木太淳は山脇東洋の圖繪を見て、寛政二年に屍體を貰ひ、眼の解剖をして、解體瑣言、眼科精義を著した。

衣關順庵（きぬせじゅん）は眼の解剖を行ひ、之を基として眼科を立て、文化七年に眼目明辨なる本を作り、系統的に眼の解剖を說明した。

山田大圓　眼科提要を著した。
本庄普一　眼科錦囊を作つた。正續二篇あつて、漢を元とし蘭を加へて纏つた本とした。
上田公鼎　眼科一家言を作つた。
小兒科　其他の科目　は著しく漢蘭折衷に向つた樣には思はれぬが多少西洋の考に動かされて居る。

八、西洋系統の醫學

西洋との交通及學術に關しては茲には述べぬ。

西洋人の入國以來西洋の學術、宗教の研究盛に行はれたが其の外にも菓子、食物等種々の品物が作られ、日本語と同樣になつて今も殘つて居る物が多い。襦袢、カステーラ、金米糖の如きは其の例である。

秀吉エスイト派を禁じ、德川時代に入つてからは全く鎖國主義を取つた。卽ち西洋との交通を廢め、禁書と稱して、エスイト教及之に類似せる洋書、洋書の支那譯等一切の輸入を禁止し、僅に和蘭のみが交通を占有し、平戸を限り貿易を許可せられたが、後には更に長崎の出島に局限せられた。

之より先、南蠻人の澤野中庵は長崎に居て、判田、西等の門弟を出した。判田は慶長元和の初に澳門に渡り醫學を修めた。判田の門人吉田安齋、杉本仲慶何れも南蠻の外科を以て立つた。

栗崎道喜——子は道有——は天正二年九歲にして呂宋に行き留る事三十年、四十歲餘にして歸り、長

崎に於て醫術を開業した。

故に當時は西流、栗崎流、判田流等の外科が行はれたが、之等の南蠻流は變て和蘭流と變り、長崎に門戸を張つた。

西洋人も多く渡來し、慶安二年（西暦一六四九年）にはカスバルが日本に漂着した。彼は外科醫で、門弟を作り、共にカスバル流の外科を廣めた。華岡青洲も其の一人である。

和蘭の歴史に依ればカスバルは Caspar Schambergen で、第一回使節の隨行員として江戸に入つて居る。

後、蘭人ホフマン Hoffman が來た。楢林鎮山はアムブロア、パーレ Ammb roas Paré の外科書を貰ひ彼に師事して醫學を修めた。時に西暦一六五〇年である。

更にアルマンス Almans-Katz（西暦一六六一年）ダルネル Darner（西暦一六六三）Palm（西暦一六六六）Stieven（西暦一六七三）等相踵いで來朝した。何れも出島の和蘭東印度會社の社員である。嵐山甫安就いて學び卒業免狀を貰つた。

William Rhyne は西〇一六七三年に日本を純學術的に歐洲に紹介した。

西洋の醫官は毎年江戸に來た。

元祿三年に有名なるエンゲルウェルト、ケムペルが Engelvert Kaempfer 長崎に來て二年間滯在した。

西洋に紹介する目的で江戸にも行つて勉強をした。彼の著書は有名である。

故に長崎には多くの西洋の醫者が居て醫學を廣めて居た事がわかる。

アムブロアス、パーレの外科書も西、楢林の兩人に依り飜譯せられ、外科訓蒙圖彙として抄錄された。卽禁書に依り學術は地に落ちた樣であつたが、明滅の間にも西洋の研究は不充分乍ら行はれて居た。

八代將軍吉宗は天文を好み自ら研究をした。支那の天文書は曖昧なるに反し、和蘭の圖を見れば明瞭である。故に蘭學に志ある者を家來に尋ね、遂に選ばれて青木文藏が讀む事となつた。

昆陽青木文藏は魚屋の子であるが、讀書を好み東山文庫の係となり、經濟卽ち政事經世の研究をして居た。當時は法令に依り洋書を讀む事は禁ぜられて居たが、偶々吉宗公の望が發端となり、彼は蘭書を讀む事を許された。——昆陽は關東に甘藷を移植した、燒芋屋の神樣である。——

青木昆陽は和蘭公使の通辭が江戸の本石町に來た折に、醫官の野呂元丈と共に就いて學んだ。野呂の本草和解を見るに、ヨンストンの本草書中にある。魚蟲の名を擧げし程度の物でムスクルス、ドードへフルスなる醫者に說明を求め藥の分量、用法、動植物の名稱を聞き寫したと書いて居る。

昆陽は早く蘭書が讀みたいので單語の暗記に努め、二ヶ月で通辭が江戸を去つた後は態々長崎に到り五百の單語を覺えた。

後、吉宗の死去に依り研究が頓挫したので之を一冊に纒め、和蘭文字譯法として世に出した。

昆陽の死ぬ二年前に、前野良澤なる奇人が居た。豐前中津の醫官で、中津侯に仕へ扶持二百石を貰つた。幼少にして親を失ひ、母方の祖父宮田全澤に扶養せられた。全澤は吉益東洞の醫學を修め、猿若、尺八等を趣味として居た。

同藩の士に坂江鷗なる者が居た。或日蘭書を携へて良澤を訪れ、『之が讀めるか』と云つた。良澤は

讀めぬ。『國や言葉は違つても、同じ人間なれば讀める筈なり、讀める。』と云つたが讀めなかつた。時に良澤は四十七歳。遂に意を決し青木昆陽に就いて蘭學を學ばんと志した。昆陽は大いに喜び、知れる所を悉く傳へたが、單語五百を出でず、用を辨じないので良澤は長崎の方へ遊學を思ひ立つた。中津侯は彼の請を許し、『汝が今蘭學に從事せんとする其の志は甚だ善いが、物事は兩兎を追ふ者は一兎を得ず、志を遂げんと欲するならば醫者を止めよ』と云はれたので感泣して退き、二百石の祿を貰つて專ら蘭學を修めた。

周圍の者は之を見て讒言したので、彼は變り者として取扱はれたが、後に至り殿樣が『汝は和蘭の化物なり。』と云はれたので蘭化と號した。

明和七年に單語二百を暗記して長崎より江戸に歸つた。研究が一人になつたので其の相手を求めたが仲間は容易に得られなかつた。

之より八九年前に後藤梨春と云ふ人が居た。紅毛談を著し、和蘭の事を書いたが、直に發賣禁止となつた。abc二十六文字があつたからである。――紅毛とは英吉利人の事を云ふも、此の場合には和蘭人、寧ろ外國人の意味である。――

當時和蘭に關する知識慾は非常な物であつた。江戸の麹町に安富寄碩と云ふ外科醫者が居た。長崎で勉强した折に羅馬字で『いろは』を書いて貰ひ、和蘭語が出來ると云ひ觸したので、多くの門人を生じた。中川淳庵も其の一人である。

前野良澤は單語七百も知つて居たが、人と話すわけに行かなかつた。明和八年三月三日、良澤の所に

酒井若狹守の醫官杉田玄白より手紙が來た。

『明日小塚原で腑分けがあるから見に行き度い望が有るならば、朝早く淺草山谷の出口の茶屋まで來い。』翌朝玄白の外に中川淳庵も來た。

時に良澤は四十八歳。玄白は彼より十年若く、中川は血氣盛りの二十歳であつた。

良澤は懷より一冊の蘭書を出し、『之はターヘル、アナトミア Tabula anatomica と稱する和蘭の解剖書にて先年長崎に於て和蘭人より得たり。』と云つた。見れば二百兩を投じて買つた玄白の本と同一である。

之は不思議だと云つて、良澤が其の書を披き『此はロングとて肺なり。之はハルトとて心なり。之はマーグとて胃なり……』等說明して居ると、愈々回向院で解剖が初まつた。當時は解剖を『腑分け』と稱して居た。

術者は穢多の虎松で九十位の爺、屍體は五十代で、靑茶婆と云ふ京都生れの女であつた。

目擊する所はターヘルアナトミアの圖と全く變る所が無かつたので、三人は歸途に蘭學研究を堅く約して別れた。

早速翌日より杉田、中川は鐵砲洲なる良澤の家に集り、ターヘルを讀み初めたが、只呆れに呆れるばかりで少しも進捗しなかつた。賴む所はコーリン佛蘭辭書と良澤の知れる七百の單語である。體表の名稱は實際と對照して譯したが、其他の名稱に至つては常に難澁を極め、徒勞に終る日が少くなかつた。

かくて玄白は稿を改むる事十一度、明和八年三月四日の解剖の日より安永三年の秋に至る、辛酸四年の

歳月を費して出來上つたのが有名なる解體新書である。元來此のターヘル アナトミアはダンチヒの中學校教科書を蘭譯した物である。

解體新書出でて二年卽ち獨學の飜譯初まつて六年目に、有名なる和蘭の醫官ツムベルグ Thumberg が日本に來た。江戸に於て方々の醫者に接した事を書いた獨逸文の記事には、幕府の醫官桂川甫周、酒井の醫官中川淳庵に會ふの記があつて、桂川は稍話せると云つて居る。又二人は彼に難書を見せて困らせた事も出て居る。

寛致十年にヘルマン、レツツケ Hermam Letzke が來た。

彼は大學卒業後間も無い唯の醫者であつた。

大槻磐水は彼に種々の質問を發した。ハイステル Heister の事を尋ねたが、彼は知らなかつた。膈噦（胃或は食道癌なり）の事を問ふたが、レツツケは羅典語で Morabus bomitus と答へたので、磐水は、『Morbus vomitus で吐く病である。此の醫者は何も知らぬ。』と逆に返した。

解體新書公刊の可否に就いては大いに頭を惱まし、試みに解體約言と云ふ本を出したが反響がなかつたので、更に之を京都の禁裏に納めて無事に通過した。幕府の方は中川淳庵が其の補佐人なる岡某に賴んで事無きを得た。

當時は和蘭最負の田沼玄蕃守が總理大臣であつたからである。

然し承知せぬのは漢法醫であつた。解體は人體を解くの意ではない。人體ならば體解となる可きである。解體とは國家散亂滅亡するの謂である。と稱し詭辯を以て攻擊し始めた。

良澤は三人中の先輩であり、又解體新書は彼に依り初めて完成したにも拘らず、杉田玄白著すとしたのみで彼の名を出さなかつた。通辭吉尾某の序文に出でた名前をすら抹殺して、名利に淡白なる事を示した。

良澤の友に高山彦九郎が居た。彦九郎が江戸に出れば淺草全福寺、或は幡隨院長兵衛の書院に集り、政治を論じ、和蘭の話をして居た。白河樂翁公も種々の事を聞かれた。

寛政四年にロシアが使節を以て通商を求めたので、天下は鼎の沸くが如くに沸騰した。彼は本を書いて露國の地理風俗を公にした。外に著書は甚だ多かつた。

天保十四年に大槻磐水は解體新書を訂正した。後に宇田川榕齋之を詳しくして三卷となし醫範提綱と名附けた。之は文化辰の年である。

前野に次で最も力を盡したのは杉田玄白である。彼は終世蘭法外科を專門として、江戸の濱町に一戸を構へ、隨分流行した人である。解體新書の飜譯成る度に之をまとめて出版した。世人に早く傳へ度い熱心の爲であつたが、良澤は之を好まなかつた。中川、桂川の若輩は、寧ろ面白半分に携つて居たのである。

杉田の著書には形影夜話、瘍家大成等があつて、醫學に關する自己の經驗及び見聞を記載して居る。

黴毒の治療を得意としたので此の類の患者が大部を占めて居た。彫刻に巧な一患者があつた、黴毒の治療を受け全治したので大に喜び、直に玄白の像を刻み、店頭に陳列して往來の人に見せて居た。

『杉田先生だ』と評し合ふのを聞くに及んで、之を杉田家に贈與し、杉田家に於ては神として之を祀

つた。

殊に玄白が親切叮嚀なる人であつた一事は、解體新書を早く出さんとした心と一致して居る。號を鵠齋と稱した。

桂川甫周は同僚中最も若年であつた。祖先は大和の人で森島と稱した。三代目の人が平戸の嵐山甫安に入門して大成したので、姓を嵐山より出る桂川に改めた。彼甫周は美貌の持主で、侍醫となつた。

寛政四年に伊勢の幸大夫は露西亞に漂着し、松前に送還せられた。當時露西亞に行つた者は一人もなかつた。

彼はペテルスブルグまで行つたので將軍は珍らしく思ひ、謁見を許した。質問に應じたる話の中に、露西亞でも桂川の名を知つて居ると述べた。桂川は傍に此の話を聞いて居た。——ツムベルグの本に彼の名が出て居たためである。——當時、露西亞は大なる野心を抱き日本の研究を怠らなかつた。

故に桂川は露西亞の內情を詳しく說き魯西亞略記、北槎聞略を出して警戒する所があつた。早逝した爲に著書は少い。專門に關しては外科書を出して居る。

中川淳庵　傳記は不明である。若狹に生れ、杉田と同じ大名に仕ゐた。

以上一味の人々の努力に依り、通辭の手を經ずして蘭文を讀み得る域に達したので、長崎の通辭よりは憎まれたが、江戸に於ては蘭學と云ふ名稱の下に一派を爲すに至つた。

天明八年に仙臺より大槻磐水出で、蘭學楷梯と稱する文法書を出してより後は、蘭學の研究は江戸に出る事を必要としなくなつた。

當時に於ける外來の醫書は獨逸一流大家の原書の蘭譯を網羅して居る。例へばバンフル、ハイステルの外科書、クーペル、ブランカールツの解剖書、ボイス、ゴルテルの內科書等は其主なる物であつて、之等を悉く飜譯せんと企てゝ居た。

大槻磐水と相並んで、宇田川玄隨、其後に同榛齋、京都の小石元俊、海上隨鷗、大阪に於ける傘の柄替わで後に江戸に留學した橋本宗吉等競ひ蘭學を研究したので、十年を經ずして、廣く四方に普及し、京都にも小森桃塢、藤林普山等を出した。

文化、文政の頃には玄白の子杉田立卿を初め多くの人物が輩出した。

文化二年にシーボルドが長崎に來て多くの門人を出した。當時の洋書は讀み且つ理解するに止まつて居たが、獨人來るに及び實驗を始めた。シーボルドは和蘭の醫官であつたが、許可を得て鳴瀧に出で、醫者を集めて臨床講義を行つた。

其頃江戸に於ては宇田川榛齋の門人坪井信道（號誠軒）は多くの大家を門人に有し、盛に蘭學を擴めたので、德川幕府も時勢に迫られ、文化八年飜譯局を作り大槻玄澤を其の係とした。後、名を蕃書調所と改め飜譯事業の外に醫術を敎わ、杉田成卿、箕作阮甫、川本幸民を擧げて敎授とした。

多紀の一派は之に反對の氣勢を示し、多紀樂眞院が政府に運動をした結果、嘉永二年に醫官の蘭法醫研究を禁じ、飜譯の醫書も出版に際しては屆出を要する事となつた。故に林洞海の譯したワートルの醫學書も出版を許されなかつた。

然るに嘉永六年ペルリ浦賀に來り、通商を求むるに及び、事態迫つて大槻俊齋は銃創鑛言を著はし、

江川太郎左衛門は許可を待たずして高壓的に之を出版せしめた。時に安政三年である。茲に於てワーテルの譯も直に出版せられた。

嘉永二年に至つてかの禁書を解き、學問を奬勵す可しと云ふ反對の說を出し、將軍の病篤き時には蘭法醫を侍醫とした。伊藤玄朴が其の主唱者である。

玄朴は政略に富み、患者を一身に吸收したので漢法醫の怒を招いた。

彼は醫療正始なる大著述をしたが、過半は高野長英の飜譯する所である。伊藤は障子に硝子を用ひ贅澤を極めて居た。高野長英の飜譯に長じ、貧に苦しむを見て醫療正始の譯出を依囑した。

長英は酒癖を有し、金に窮すれば必ず時刻を選んで、伊藤の宅に到り、患者の面前に於て彼を罵倒した。伊藤は已むを得ず金を與にて返すのが常であつた。

政府に於ても和蘭醫方禁止の不可なるを知り、松本了順に命じ、期間を定めて蘭醫ポンペに就き西洋醫學を講習せしめた。故に松本は長崎に到り講習所を開設した。後之は精得館となり維新前まで續いた。

江戸に於ても同樣の必要を生じたので、漢法醫の壓迫を受けた者が種痘所なる名稱の下に作つた所の結社を改めて、蘭醫學の講習所とした。之が卽ち現今大學の濫觴である。

以上維新に至る迄の主なる醫學系統の概略である。

二、專門學科發達の狀況

物理學

文政十年靑地林宗の著した氣海觀瀾が初めである。河本幸民の氣海觀瀾廣義は更に精しい。時に京都

に於ては廣瀨元恭は理學提要八卷を作つた。

化學

靑地林宗の氣海觀瀾出でゝ後十年、宇田川榕菴は舍密開宗を著はし、後二三年にして、河本幸民は化學通なる書を出した。

解剖學

安政三年解體新書出でゝ和蘭の解剖圖を見るに及び、其の實際を知らんとする傾向顯著となり、橘南蹊、柚木太淳等を初め解剖をした人も多數に上つた。

解體發蒙は荻野氏の解剖、橘氏の解剖、山脇氏の解剖等を纏めて書いた本である。ブランカーズに依る物も出て居る。支那の古い文獻卽ち解剖の記載及歷史的の事柄は傍に竝べて書いて居る。

小出君德は天保元年より同七年の間に大阪に於て刑屍を貰ひ、自ら七個の解剖を爲し、集めて道竇私錄三卷を著した。其他醫療正治等の本がある。本にならぬ解剖圖も頗る多い。

解剖は盛に行はれても骨格を得る事は容易でなかつた。廣嶋の醫師星野丁悅は研究の目的を以て骨格を得んと欲し、死刑囚の拂下げを受け、海に行き之を炙り燒にし、殘りし骨悉くを原田孝次と稱する細工師に命じて模造せしめ、之に白粉を塗つて木骨と稱した。

後廣嶋に着いた新刊の解體新書に比較するに何等の相異をも認めぬので、江戸の大槻、杉田等に送つた。彼等は名が宜しくないと稱して身幹儀と改めた（廣嶋後藤氏秘藏）。此の功蹟に依り星野は每年年始に幕府に謁見を仰せ附かつた。

後二十年を經て大阪の整骨專門醫谷務文獻は第二代の木骨を作つた（東大解剖學教室保管）。但頭蓋骨のみである。

學術的方面でも、解體新書に於て大なる困難に逢着した。殊に骨折つたのは名稱を附する事である。『神經』は杉田玄白等の最も苦心して捻出した名稱であつて、支那本にては腦氣筋と云つて居る。

支那の筋は我が國の腱で、腱は支那の黒筋に當る。

『腱』は筋の本なり。』と說文にあるが故に『腱』と譯したのである。口の天井は支那に言葉が無い。故に『口蓋』を作つた。『虹彩』も支那には無い。虹の膜を如何にしやうかと思つたが遂に此名を附した。

支那に說かれないで屢々出し物はバンクレアスである。强ひて字を當てれば中焦府となる。故に解體新書には『大機里爾（大なる淋巴腺の意）は長い。故に肫と名附く。』とて肫の字を發明した。後に、宇田川榕齋が同じく肉月に萃と云ふ字を作り膵に改めた。

又『プロスタタは護る意なれば攝護と名を附く。ハギナは室なり、腟となす、室の邊にて肉に從ふ。音叱と爲す。卽ち意味を取りしなり。康熙字略の尺栗切、肉生の腟にはあらざるなり、新に作りしなり。』と書いてある。

『腺』も新に作つた語である。

京都、大阪にも專門家が居た。緒方洪庵は大阪に於て社を結び、設備を整ひて研究をした。村田藏六（大村益次郎）も深く解剖を行つた人である。

生理學

高野長英の醫原樞要がある。獨逸のブルーメンバッハ、ローゼ、デラハイエの原著を抄錄した物で、Physiologie を人身究理と名附け、中にはブールメン、バッハの活力說がある。

後、廣瀨元恭が人身究理の名を附して、佛のリセランド Richerand の飜譯を出した。原書は生理學界に廣く讀まれて十三版を重ね、各國に譯せられたるビタリスムスの本である。

醫原樞要に次いで、彼は安政三年に知生論を出版した。イペー Ypey の生理書の譯本で、獨逸のハルレルの說を和蘭のイペーが蘭譯した物である。

後京都の藤林普山は生理眞源を著し、其の他ホブソンの譯本全體新論、島村鼎甫の生理發蒙等も出來た。

病理學

弘化四年に緒方洪庵は病理通論を出した。病理學總論、病的生理を包含し、フーヘランド、ハルトマン、スプレンゲル等の本を纒めた物である。

診斷學

文化十二年に吉雄永章は因液發備を著し、尿檢査に依つて疾病を發見しやうとした。同時に江馬蘭齋は五液診法を出した。

文政九年坪井誠軒は診候大概なる大冊を出した。中に『テルモメーテルにて體溫を測れ。』とあるも當時テルモメーテルありしや否やは不明である。

フーヘランド診斷學の全譯は靑木周弼の察病龜鑑として出されて居る。

打診、聽診の法も早く始まり、フーヘランドの著述は西暦一八三六年で、レンネックが聽診法を始めたのは西暦一八一九年である。我國では蘭醫モーニッケ嘉永元年に聽診を始め、杉田成卿は模造品を得て之を用ひ、同三年に聽胸器略用を出した。

之より先、文化二年、クーゼンステルンに隨行して來た醫官のラングスドルフは自身にも知らぬ心臟の聽診を日本の醫者がやつて居たと記して居るが、杉田がモーニッケに敎ゐられてゐたのである。嘉永二年以前の聽診法は不明である。

兎に角『聽胸器倒に持てば二百兩』斯の如き醫者の多かつた事は事實である。

内　科

内科は蘭學始まつて後二十年。寛政五年に西暦一七四四年版のヨハネス、デ、ゴルテルの内科書が飜譯された。宇田川槐園の西說内科選要が卽ち之である。後宇田川玄眞が校訂を加ゐた物には羅典名が悉く列擧されて居る。全部十五卷より成る。

此の時桂川の弟子吉田長淑は之を敎科書として研究を積み、江戸に和蘭内科を開き、人氣を博した。後コンスブリュクの内科書（小關三英譯）は大成内科集成、ストルクの本（安立長雋譯）は醫方研幾ビショッフの書は伊東玄朴に依り醫療正始として、其他扶氏經驗遺訓、スウイテン、チンツト、コンラージ、カンスタット等の内科書は殆ど全部飜譯されて居る。和蘭を經過して居るけれども、多くは獨逸本で、クスラン、チソウの本が僅に佛蘭西本である。

故に當時の譯本を眞面目に熟讀玩味した人が居るならば、我國の醫學は獨逸と同程度に達す可き譯であつた。

外　科

ハイステルの書を全譯した物が瘍醫新書五十卷である。綳帶學にも總論より各論までの飜譯がある。多くは大槻玄澤の事業である。

眼　科

眼科新書と云ふ杉田錦腸の出した小さい本がある。ブレンキの全譯である。彼の專門は不明であるが著書に從事し、内科の外に皮膚病等もあつて、梅毒新書等の譯本を著して居る。

婦人科

ブレンキの書の全譯が初めである。（船曳卓堂の婦人病論）

小兒科

宇田川榛齋が譯して小兒諸病鑑法治法全書三十卷としたのはローゼン、フアン、ローゼンスタインの敎科書で獨逸では六版となる。又堀内素堂に依るフーヘランド小兒科學の抄譯が幼々精義である。

藥物其他は略

植物學

植物學は醫學の一派として有用であつた。伊東圭介はリンネの二十四綱目を出して、泰西本草名疏と名づけた。

植物學專門には宇田川榕菴の植學啓源が始めである。

衛生、治療、軍人醫學は略

正　骨（整骨に同じ）

跌撲及損傷する所の骨節を整ゐるの意味である。支那宋の世に初まり、明の世に接骨と稱した。

我國では寛政の初め長崎の吉原元陳が正骨要訣を出した。門人二宮彦可は正骨範を著はして一家を成し、主として脱臼の正復術と繃帶を行つた。

三年を經て大阪の各務文献は整骨新書を著はし脱臼、筋肉の攣縮、强直を治し、西洋の法に從ひ種々の整形的治療を施した。

九　治　療　史

治療は藥物を内用する事が主であつた。湯液醴酒とて支那でも古い事である。故に病を除く方法を藥る或は藥方と云ひ、其術に用ふる物を藥と稱した。平田篤胤は附ける意なりと云ゐるも賛成は出來ぬ。

刺洛　石で血を出す方法は、古くから行はれたが、刺洛の名を附し、一定の方法で爲すに至つたのは、山脇東洋、永富獨嘯庵、荻野元凱、中神琴溪等が初めで、解體新書以後にフーヘランドの本より採用された物である。

角法　之に二種あつて、針を刺して施す法を濕角と云ひ、針を用ひずに直接皮膚に施すを乾角と云ふ。之は唐時代の事である。青竹、瓢簞を用ひた事もある。

西洋の角法が入つてから後は硝子を用ひた。享和三年に出來た蘭療法に精しく書いてある。

蛆鍼　蛭を用ひて血を出す事は唐の時代より行はれ、其の頃我國に傳はつた。我國では蛭喰（蛭飼）と稱した。東鑑にも將軍樣御蚊觸（瘡疹）の間云々の所に出て居る。平安朝から鎌倉時代に蛭飼の居た事は暗齋隨筆に書いてある。德川時代になつて文化、文政の頃には全く止んだ。洋書と共に西洋流蕓用法が入つて來たからである。

發泡打膿法　皮膚に刺戟性の物を塗り水泡を作る法は支那の古代にもあつて、猫跡草を揉み臀部の皮膚に乘せて天灸と云つた。

天明の始に杉田玄白が現今の發泡法を和蘭の本から見て『フォンタネル』と云ひ、大槻玄澤は蕓青發泡と云つた。

灌腸　唐の傷寒論に『猪の膽に酢少許を入れて灌腸す』と書いてある。千金方には鹽を入れし酒、蜜を入れし水を筒で腸内に灌ぎ入れた。聖濟總錄では竹の筒を用ひ、醫學正傳では小なる竹の筒で油其他の藥を入れ、之を灌道の法と稱した。寛政の初の内科選要にはケレイステエルと書き『水鐵砲を用ひて苔麻林度、旃那に蜜を加ゐし物を水に和して入れる』と說明して居るのは西洋の飜譯である。

享和三年にケレイステールを密導法と譯したが、支那では灌道と云ひ、密導とは坐藥の名である。

坐藥　も古い。直腸及膣坐藥は金匱要略、傷寒論にも出て居る。

道尿　千金方、金匱要略に出て居る。唐宋時代の本には通陰の法がある。猪の膀胱を取り之に羽毛の軸を附し、之に空氣を充して莖口より吹き入れ、尿を出すのである。

吹陰とは青葱の尖れる葉を尿道口に挿入して吹く法である。

通塞とは羽毛の管を尿道に入れ、中に水銀を灌入して排尿せしむる法であるが、後には傳らない。

天明頃より西洋のカテーテルを用ひ、初は疏尿管と云つたが、文政後はカテーテルの原名を稱した。初は金屬製、後にはゴム製の物を用ひた。

注射法　皮下に藥物を注射し初めたのは安政二年である。アレキサンデル、ウードの發案であるが、日本の鍼に暗示を得た物である。安政六年の内服同功には皮下注射が載せてある。

灌水法　水を灌いで行ふ療法は神代から初まり、平安朝以後盛に行はれ、氣絶した者には水を吹きかけて蘇生せしめ、又瀧を用ひて頭痛、肩の凝り、精神病者を治した。德川の中頃には灌水に關する多くの著書が出で、京都の清水寺音羽の瀧等は實際に使用せられた。香川修庵の一本堂藥に學理的記載があつたからである。

浴法　發汗の目的に用ひられ、平安朝時代の物語にも多い。

藥物的浴法は唐の千金方が初である。外瘡、膀胱の病、疱瘡の治療に用ひられ發汗の目的では無い。

蒸氣浴は我國では湯蒸法と云ひ石風呂が用ひられた。

熱砂浴は薩摩の海岸で初められ相當に古い。

水治療法も諸方の醫者が行つて居る。

溫泉　も古く存して居るが、學理的には香川修庵の說いた溫泉論が初である。人工溫泉は山村通庵に依り發明せられた。

電氣療法　寶曆七年に平賀源内が器械を作つた。其の圖は杜川の弟森川忠良の紅毛雜話に見ゆ、硝子の摩擦で電氣を起して居る。治療には用ひて居ない。

弘化四年に乾電池に依る治療を行つた事が内服同功に出て居る。安政六年頃には麻痺、痙攣、神經病其他に頻りに用ひた。

電氣通標にも電氣療法の記載があるが、感電電氣に止まる。然るに内服同功には平流電氣を擧げて居る。

一〇　疾病史

疫病は何れの國に於ても文化と深い關係を有し、この爲に常に世間を騷がすから、宗教、教育、政治、經濟とは直接の關係がある。從うて文化の歷史に關する方面に於て、廣い範圍に亘り多くの材料を持つて居る。

西洋に於ては疫病の研究は進んで居るが、我國に於ては崇神天皇の五年（西暦九三年）に役病の名が出て居る。古事記には疫病、日本書記には支那字を用ひて疾疫と書き『わやみ』と讀んで居る。疾疫とは人夫に徵發されしと同じく、人毎に病むが故に云ひ現今の傳染病である。

疫病と稱したのは鎌倉時代からである。玉葉疫病、玉門疫病等の本に出て居る。

文武天皇の二年に此の疫病流行し、藥を朝廷より賜つた。後には少し病がはやれば直に下賜される習慣を生じた。

後、神に祈禱をする事が初まり、更に讀經も行はれた。讀む所は多く大般若經、最勝王經等である。

疫病に殊更に名稱を附した物がある。

天德三年（西暦九五九年）の記載には『人民頸腫、世號福來病』とあるが脹れ病と思はれる。

長元二年にも同樣の記錄がある。

建久八年のは『天下病惱、號一心房病。』と云つて居る。天福元年には咳嗽流行し、之を夷病と稱した。インフルエンザの事であらう。

寛元二年には『四月より六月に至り大いに疫す。病は陀鬼と稱す』と書いてある。

永正八年には『口痺流行（扁桃腺炎なる可し）し一日病んで頓死す。』とあるから可笑しい。

永正十年『たうもと云ふ大成瘡出で、平癒する良久し。形、癩病の如く、食は達者なる人の樣にす。』

もは裳瘡裘瘡で天然痘を意味し、たうは唐で豐臣時代には唐瘡と稱した。梅毒の事である。

寛永八年『天下痒病を憂ふ、名附けてひせん瘡と云ふ。』

享保十五年に『鍋冠流行し、鼻より上黑し。』之は丹毒の樣に思はれる。

疫病と名の附き、記載せられた物は、よく解らぬが、腸窒扶斯、赤痢、痲疹、天然痘、流行性感冒、ヂフテリア、耳下腺炎等である。

疫病の原因は醫學よりも文化史上に面白い。

第一に神の祟りとした。備後の風土記に依れば昔北海に居られた武塔神が、南海の女に私通に出られ其の途中に日暮れ、泊る所が無いので探して居たら、巨旦將來、蘇民將來の二人に逢つた。弟の巨旦將來は金持で、百軒の家を私有して居たが泊めなかつた。兄の蘇民將來は貧乏であつたが、宿を貸した上

に、粟の蒲團を與へ、粟の飯を喰はした。其の時『疫病起る時は蘇民將來の子孫だと云つて、茅の下に居れば治る。』と敎へた。之は朝鮮の傳說である。

欽明天皇の十三年、佛敎渡來の時に、蘇我稻目は之を祭り度いと云ひ、他の大臣は之に反對をした。故に試みに佛像を稻目に賜つたので、彼は佛殿を設けて之を禮拜した。丁度其の時疫病が流行して、皆が『國の神樣のお怒りだ。』と云つた爲に佛像は難波の堀江に投せられ、寺院は燒却せられて了つた。

敏達天皇の時に再び疫病が流行した。體に瘡を生じ、之を病む者は心持が燒かれ打たれ摧かれる樣であつた。

時の天皇は物部守屋の言を聽かれ信佛反對の方であつたが、守屋と共に罹病せられたので、皆之は佛を燒かれた罰だと云つた。之は痘瘡であるが、前のは痲疹と云ふ說がある。痲疹を稻目瘡と云ふからである。

後支那との交通が始まるに及び、神の考も變つて、疫神なる物を生じた。大寶令には春の花が飛散して疫病が起り、鎭花祭を行つて之を防ぐ事が出て居る。故に京都邊では四隅を祭る風習がある。

又人が死すれば其の魂が疫病を作ると云ひ出した。

貞觀五年に朝廷では崇道天皇（早良親王の事である。）の靈を慰むる爲に御靈會なるものを設けた。

日本在來の神は目には見えぬ。形を具へて出る神には支那の思想が入つて居る。卽ち天神、地祇、人鬼は夫れ〳〵天、地、人の神である。

鎌倉、室町時代から宋の考が入り、德川時代から眞實の考に移り、傳染する病を分けて疫病と云つた。

疫病の治療及豫防法も決まり之には面白いものがある。

呪禁が初めである。日本のはよく解らぬが、支那傳來のはよくわかつて居る。例へば正月の末日桑の木に火をつけ、井戸を照せば鬼が逃げる。又常に行はれたのは赤靈符で、支那の道教の眞似である。

日本では僧が之を行つた。

麻疹を治す呪禁として、鞋簡厮乙の三字を書いて門に貼るのは支那の古い故事から來て居る。八年三月八日に一人の僧が或る渡場に船より上らんとする時、『黄衣を纏ふた五人の男が、駕籠を擔いで來たら渡してはならぬ。其時は此の紙を見せよ、渡せば災があるぞ。』と云ひ殘して立去つた。果せる哉暫くすると五人の駕籠舁ぎが來た。渡さぬと云つたら擲らうとしたので、件の紙を見せると狼狽して逃げ去つた。駕籠には三箇の棺があり、紙には先の三字が書してあつた。

屠蘇は唐の世に疫病を豫防する爲に始められ、我國でも古くから用ひられ、天武天皇の四年正月よりは宮中でも始まつた。肉桂、小豆等七種で、毒草も混つて居る。現今の屠蘇には毒草は無い。

四角四角祭、追儺等は文化史上の興味多く、方法も精細に記載されて居る。

硫黄、燒酎、葱の頭を鼻孔に入れて疫病の侵入を防ぎ、硫黄を擦り水に溶いて腕に塗り、又左右の鼻孔にあつれば病人と床を同うしても染らないと云つた。

疫病發すれば神を祀り、祈禱をし、後疫病神を送る事が始まり、鎌倉、室町、江戸時代まで流行した。

支那の古書によれば、チブス流行すれば紅頭の蠅が人家に入り、病人の傍に來て、種々の仕草を爲ると云ふので蠅を驅除せんとし、又遠く人家を離れて、患者を隔離せんとした。危險の痘瘡には一層之を嚴重に勵行し、平安朝時代には痘瘡の患者は全く一人山中に搬んで放置したが、後に至り禁止の令が出た。

室内燻蒸も盛に行はれた。（西洋では十三、四世紀に）

流行性感冒

歴史上には咳嗽疫、しわぶき病等の名で書いてある。之等は何れも大流行をして居る。西洋語に當て箱めて『ウリッペ』と云つたのは内科選要で、醫療正始には『インフルエンザも亦之に屬す。』と書いてある。

即ち安政五年にインフルエンザと稱し、文久元年に武内玄同は明瞭に『ギリーブ』と名を附けた、流行性感冒の名は明治二十三年の大流行に際して作られた物である。

流行性感冒には面白い名がある。明和六年の因幡風。安政五年のお駒風は淫婦城木屋お駒の淨瑠璃が流行つたから。安永二年のお世話風は大きにお世話お茶でもあがれが流行つたから。天明四年の谷風は、谷風と云ふ元氣の良い男が土俵の上ではねないで、而も眞先に風邪でねたから。狂歌を作る四方仙人の『ひくならく、此の風邪を谷風と號す。云々。』と云つたのは卽ち之である。寛永七年の風邪は將軍が猪狩をされたので御猪狩風と云つた。

享和二年にはアンポンなる外人が、暹羅より漂流して來たので、アンポン風。次の流行は薩摩風。其の次のは八百屋お七のお七風。文化五年のは、ねん〳〵ころ〳〵の歌が流行つて、ねんころ風。文政四年にはたんぼう風。之は『たんぼうさん』と云ふ歌がはやつたから。文政十年のは津輕風。仕損ずれば

輿（棺の意）に乗るから。當時津輕の殿樣が輿に乘つて譴責された。天保三年には琉球使節が來たので琉球風。安政三年には米艦が浦賀に來たからアメリカ風。近頃流行したのはスペイン風と云はれて居る。

痘瘡

欽明、敏達天皇の時の疫病は、痘瘡なるか、麻疹なるか不明である。奈良朝時代の天平七年に太宰府附近に流行したのは明に痘瘡で、豌豆瘡俗に裳瘡と云つた。之は裳裾を引く樣に擴がるからである。二年して再び流行し、後次第に諸方に擴がつた。天平九年には官符に、赤斑瘡と命名して其の治療法が出た。疱瘡と云つたのは鎌倉時代で、痘瘡と云ひ始めたのは室町時代である。俗には芋瘡等云つた。醫書には主として形に依り多くの名を附して居る。天平九年の痘瘡は、夏太宰府に起り、秋には京都に行つた。口碑に依れば筑紫の人が船で朝鮮に渡り持歸つた物であると。

西洋に於ける痘瘡の歷史はアラビアに始まり、象戰爭の二年目、モハメットの生れた西暦五七二年である。印度では二千年前の經文に出て居る。故に印度、シリア、アラビア、ヨーロッパ。他方は印度、支那、朝鮮、日本の順序に傳はつた物と思はれる。

支那では西暦前一二〇年前とも云ひ、他の說に依れば、後漢の西暦四二年或は東晉の建武の頃卽ち西暦三一七年であると云ふ說もあるが、欽明天皇の時よりも古くから痘瘡は初まつて居る。

痘瘡の研究は俗人外の記錄にもあつて、醫者でも外より見ねるから精しい記載をして居る。專門の研究は池田等出でて大に進んだ。

豫防には、人痘種法 Vaccination を行つた。支那では古くから有つた方法で、記載は秦乾隆六年の種痘新書が初めである。西洋のコンスタンチノープルで行つたのよりは古い。

延享二年に、支那の商人李仁山が長崎に來て我國に傳へた。平野、林の二人は李仁山が見せた醫宗金鑑の技粹を飜譯して李仁山種痘和解なる本を作つた。先づ肥前大村で種痘を初めた。普及に努めた人の內で緒方春明が最も有名である。彼は李仁山の說に興味を感じて實地に行つた。方法は鼻乾苗法とて、瘡痂 Kruste を乾燥し粉末にして鼻孔に入れるのである。之は直に廣まり吹苗と稱した。

寬政五年に蘭醫ベルンハルド、ケレルは長崎滯在中に挿し込みワクチナチオンをなし、之を點苗と稱した。

ゼンナーの牛痘は支那より我國に傳はり、支那の嘉慶十年に出來た種痘奇法が入つてから、接種をして、天保十二年に豫防する事を知つた。之より試みる人も出で書も多く作られたが、方法がわからない上に痘苗が良くないので甚苦心をした。

嘉永元年モーニッケは鍋島侯の需めに依り牛痘苗を持つて來た。よくつかなかつた。同二年に來た痘苗がついて今日まで續いた。

中川五郎治はエトロフで露人に擒となつてロシヤに到り、種痘を學んで歸り傳へた。

痲疹

一條天皇長德四年に始めて記錄に殘り、赤斑瘡と書いてある。天平二年には痘瘡を赤斑瘡と云つて居る。他の本の記錄には稻目瘡、或は赤疱瘡と出て居る。麻疹の古い名はノケクサ或はノケホロシ、鎌倉

時代からハシカ瘡略してハシカと云ふ。ハシカとは麥の穗が喉にたちいら〳〵する感じを云ひ、麻疹の一症候を取つて名附けたものである。室町時代にはイナシリ（稻摩）と稱した。一般にはハシカで通用して居る。

記載は痘瘡より後である。

西洋では七世紀にアーロンの記載に區別されて居る。このアラビア醫學が初である。

研究及治療は痘瘡と同じ專門内で行はれた。

虎列刺

『元祿十二年江戸でコロリと云ふ病流行す。南天の實と梅干を煎じて飲めば病を受けず、そろりと罹り、ころりと死す。』と云つて居る。『正德六年夏一箇月中に江戸の町々で死する者八萬人、棺間に合はず、酒樽に入れて寺院に葬り、埋る所なければ宗旨に拘らず燒いたが、十日二十日には燒き盡せぬから菰に包み品川沖へ流した。』

之も虎列刺と云ふ證據は無い。

文政二年（西暦一八二二）に九州に起り、中國、大阪、京都に行つて止まる。對馬では見急。藝州では横病。豐後では鐵砲。難波では三日ころりと云つた。此の間にころりと云ふ名が多く現はれた。明の萬病回春には虎狼病がある。之を虎狼痢と直して讀んだのである。

支那では番痧が最も虎列刺に似て居る。

第一次の流行は文政五年である。九州を發し、山陽を經て京都に行き、東は沼津靜岡に止まり、江戸へは行かなかつた。第二次の流行は安政五年卽ち六十三年目である。蔓延の區域も第一次に比し更に廣大で、蘭醫ポンペは長崎に居て豫防及治療心得を奉行所に出し印刷して配布した。

原因其他一切不明であつた。江戸では多摩川上水に毒があると云ひ出して、水道の水を飲まず、又米人が惡い狐を殘して行つた爲だとも云ひ、鰯の中に毒がある食つてはいかぬ、或は海の魚悉く浮いて之に毒有り、等云ひ觸して魚類は喰はぬ樣にした。昨年の東京と同樣である。七月廿二日より九月廿三日に至る五十五日の間に亡者の數が淺草で一萬五千、下谷で一萬二千總數二十八萬人。八月一日より九月晦日までに一萬二千四百九十二人。戸籍無い者一萬八千人の夥しい數に達した。

第三次の流行は文久二年で、安政五年程の猖獗は極めなかつた。維新前には以上三回の大流行がある。

赤痢

奈良朝時代からの病である。支那の醫書に赤痢とある名を取つて附した物で、日本名は血糞である。

支那では隨唐の世に流行した。平安朝より鎌倉時代にかけては痢病と云ひ、又腹疫病或は垢痢等稱して、大便の性狀に依り命名して居る。德川時代になつて疫痢と名附けた。

今の疫痢は小兒暴瀉に用ひられて居る。正德年間に九州に起つて方々に傳はり、東海道尾州までも及んだ。後筑前、筑後に年々流行した。各地に於て名稱が異り疫痢、颶風、急症等云つて居る。鷹取遜庵の小兒暴痢新考に出て居る。南溟問答の中には赤痢と區別して書いてある。赤痢に用ひた藥も昔からある。

マラリア

おこり或はわらわやみとも云ふ。流行地方では小兒が侵されれば免疫になり、後年に罹らぬから、此

の名を附した物で古い病である。

癩病

古くて起原は不明である。西洋では舊約全書に、印度では釋迦當時の本に出て居る。支那でも古い。我國では昔朝鮮から外國人が內地に來た時に、人々が之を『癩病だ』と云つたら、『調べて見よ、自分は元から白いのだ。』と答ゐた噺がある。

大寶令の戸籍法に癈疾、癈疾、惡疾の區別がある。令義解に『惡疾とは白癩を謂ふなり』とあつて、病原候論を寫した物である。然し其後に此の本に無い事が載せてある。又『能く傍人に注染す。』と。此の場合は遺傳では無くて感染である。故に惡疾は離緣七條件の一となつて居る。其の頃の癩病の傳染は素人にもわかり、症候の記錄に依れば、結節癩で、傳染力の强かつた事を示して居る。

平安朝より鎌倉時代になると傳染ではなくて、前世の業病と云ひ出したので、癩病を對稱物として、慈善事業が起つて來た。

淋病

病の存在は古代からであつて、本體は尿、膀胱、尿道及腎の病、卽ち尿の排出が良くない病であつて、傳染性の Gonorrhoe では無い。古は之を淋證と云つて居た。

今の Gonorrhoe は支那の本では膿淋と稱して、古い發見ではない。病原候論に淋なる病があり、又膏淋なる病が似て居るけれ共、よく考ふれば違つて居る。

膿汁、血液を出す現今と同一の症狀を記載したのは、足利時代の末期に出來た玉機微義が初めである。

西洋でも此の病の發見は古い事は無い。

梅毒

大同類聚方に記載されてからシャイベは日本には古代から梅毒があると云つたが、元來此の本は信用がされない。又人類學雜誌に石器時代から梅毒があると發表した者もあるが、其の論據とされる石器時代の骨の癒着は外傷に依る物で梅毒とは考ゐられない。

我國に梅毒が來た明瞭な記載は永正十年である。永正九年の月海雜錄に『人民多く瘡(かさ)あり、浸淫瘡(しんみそう)に似たり。稀に見る所なり。浸淫瘡の藥にて癒れり。之を唐瘡或は琉球瘡と云ふ。』と書いてある。

永正年間は室町時代で、名の起原より考ふれば、支那人或は琉球人が傳ゐた物であつて、當時まで人の知らなかつた病である事がわかる。

梅毒は外國に於ても外來病とされて居る。卽ち南歐洲ではネアペル病、西班牙ではガリア病、佛蘭西では伊太利病。獨逸、露西亞、英吉利では佛蘭西病。葡萄牙では西班牙病と云つて居る。

支那には洪治九年（西暦一四九六年）に西洋の船が東洋に來た時から始まつた。『吳の人は知らず、故に廣東瘡と云ふ。』

長崎では之をスパンポックと云ひ、醫者の本には揚梅瘡と書いてある。天正の頃、曲直瀨道三の著した天正記には、唐瘡を病んだ人の名前が出て居て、藝妓お國や、基資入道等も罹つて居る。

軟性下疳は古い。西洋でも同である。鎌倉時代の萬安方には妬精瘡があつて此病の記載をして居る。即ち『不潔の交接にて發する陰部の潰瘍にして、之を玉莖瘡と云ふ。』

福田方の妬精瘡には、『陰頭節の病なり、男子は陰の頭、婦人は玉門の中にあり。形は臼の穴を爲し食み入りて痛む』と書いてある。妬精瘡は羅慾の人の病である。羅慾とは他人の交接したる女人を侵す事により前人の淫が後人の淫と合して起る病である。

脚氣

昔は支那に於ては傳染病として酷く流行した。後に性質の變化した爲か、或は診る人の異なつた爲か流行病ではなくて足の脹れる病となつた。萬安方の脚氣は瘴毒脚氣で、今日と同一の病である。然るを誤つて腎臓病で足脹るゝ者をも脚氣と爲した。故に平安朝時代の『足の氣』も矢張足の惡い者で、脚氣とは違ふ。鎌倉時代に脚氣が流行した。之は瘴氣脚氣を說いて居る。卽ち『足麻痺して痛み、又下腹の力麻痺す云々。』

喫茶養生記には『今の人、總て病を脚氣と云ふ笑ふ可し。』と書いてある。又『諸病を脚氣と稱して醫する所を知らず。』と書いた人も居る。

德川時代には、此の病を江戸患ひと稱し、『江戸患ひは、故鄕に歸るとて箱根を越せば治る。不審の病なり。』と云つて居る。

近代の脚氣は元祿、享保の頃江戸に廣く發生した病である。

一一 醫人道義學 Deontologie

道德は始めに考へねばならぬ。醫者の倫理は古から支那では千金方の始に書いてあり、平安朝の醫心方には卷頭に載せてある。西洋でもヒポクラテスの本には部門を分けて倫理を說いて居る。後に專門分科の事のみを記載する樣になつてから、倫理は醫書より姿を消して了つた。

獨逸のフーヘランドの經驗遺訓にも多くの訓戒を說き、然る後に治療及疾病の記載をして居る。現今では殆ど全く書いてはない。

倫理の考が醫者に必要なる事は言を俟たぬ。道德の考を離れては醫術は成立せぬ。故に Deontologie として述べる必要がある。

倫理の考は古から有つて、藥南方、千金方、醫斷抄等にも出て居る。之等を纏めて書いたのは元祿年間に竹中通庵の著した醫療兩鑑である。之には『一、綿密に治療、診斷する事をせず、捷法を好み簡略に走る。二、諸賢の言を聞いても受取らず、眞正の道を盲にす。三、富貴を羨み名利を欲す。以上三種の醫者の病を治さねばならぬ。』と云つて居る。

正德三年に加藤謙齋は病家示訓を作り病家をして醫者の善惡を知らしめた。筑前の香月牛山は習醫先入を著はして同僚、社會、公衆に對する義務を說いた。フーヘランドの醫戒の如き物である。

外に、杏林內省錄六冊、醫家初訓其他多くの本があつて醫者の道德を說いて居る。

今日では權利義務と云ふが、發生的には義務が先にあつて、然る後に權利を生ずる。從つて道德觀念

の後に法律觀念が出る。故に醫者が權利を主張するのは義務を盡して後でなければならぬ。法律は道德を守る爲に作るのである。

諷刺的に醫者の事を書いた本もある。

醫者風流解三卷は皮肉を以て醫者を戒めて居る。

『醫者が流行る爲には如何なる偉い人と立合つても臆せずにやれ、議論をして負けても良い。病人は善く饒舌つた方を偉いと思ふ。大醫が拳固を出したら逃げよ。』

敎訓萬病回春に藪醫者の流行する法がある。『玄關に多くの患者を待たせよ。人を遣はして隣家に自分の家を尋ねさせよ。』と云つて居る。

山脇東洋の養壽院醫則には『醫道は天下藥物の淵叢なり。』と書いてある。

片倉鶴陵も面白い事を云つて居る。卽ち藪醫を碑醫と稱して居る。

之等の事柄は現今用ふるには訂正を要するも、今日の狀態に應じた醫者の倫理書を作り初學者を指導する事は必要であると思ふ。

九十年前大阪に畑白玄なる人が居た。醫者は出來たが、患者は來なかつた。或時金持の主人が病で往診を乞ふた。彼は衣服が無いから斷つた。故に金持の使は衣服刀を受出して連れて來た。

會津の醫者淸水某は痔癪の强い人であつた。

殿樣が御病氣の時に彼是云はれたら『自分の術が拙いから云はれる。醫者は廢める。』と云つて藥籠を壞したので、殿樣は謝られた。

戸田旭山は非藥選を著して香川修庵の藥選を批難したにも拘らず、香川は偉いと云つて、息子を彼に入門せしめた。又或時戸田の弟子が親の病氣の往診を乞ふた。戸田は快く承諾した。終わて歸らんとする時、序だからとて金持の家から二三人の病人を連れて來た。戸田は大に怒り、親を出しにして自分を此處まで連れて來たとて、直に弟子を破門した。

大阪で婆さんが瀨戸物買ひをして居た。戸田が行き合せると、婆さんは彼の顏を眺めて居たが、泪を流して泣き初めた。戸田は不審に思ひ理由を尋ねると、その答は次の樣であつた。『あなたの顏を眺めると泪が出る。私の孫の病を診て貰ひ度かつたが、一日に十人しか見られぬので遂に死んだ。』戸田は『十一人でも良かつたのに、何故連れて來なかつたか、惜い事をした。』と云つた。其の後十一人にしやうと思つたがしなかつた。

こんな話は奇矯であるが、心持は今の世の人も少しも變りは無い。只善い方に向ければよい。誠を離れないで醫者の業を行ふ可き物と思ふ。歷史を見る間に倫理の意味のある事もわかつて來る。

日本醫學史講　終

少し健康を害して居たし、ノートに自信が無い上に、初めは出す心算で取つても居なかつたので、隨分辭退しましたが、雜誌部の方の熱心なる御要望は、私の弱い性質に手傳はれて、遂に原稿をお引受けしなければならぬ破目に陷りました。勿論速記ではありませんから、講演の內容に於ける取捨も隨所に行はれ、夥しい史實の前後及誤寫も免れない事と思ひます。然し乍ら富士川博士の講演された意味は、醫學の變遷に關する系統的の概念を與へて醫家の參考に供する爲であつて見れば、以上の事柄は博士の主旨を徹底せしむる上に於て大なる故障ともなるまいと信じますので、思ひ切つて此の稿を雜誌部にお渡しします——。

山川晋一郎

大正十二年五月二十日印刷
大正十二年五月二十五日發行

（非賣品）

編輯兼發行者　九州帝國大學醫學部雜誌部內　大園英夫

印刷者　福岡市博多古小路町二十五番地　山田純一郎

印刷所　福岡市博多古小路町二十五番地　山田印刷所
振替福岡五四六六番
電話一〇一八番

發行所　九州帝國大學醫學部雜誌部

不許複製

60
659

NO.

PATENTED NO. 119016

"F-M"

PAMPHLET BINDERS

are carried in stock in the following sizes

Catalog No.	High		Wide		Thick
851(菊倍)	30. cm	x	22.5cm.	x	1cm.
852(四六倍)	26. „	x	18.5 „	x	1 „
853(菊)	22.5 „	x	15. „	x	1 „
854(四六)	18.5 „	x	12.5 „	x	1 „
855(特)	24. „	x	15. „	x	1 „

Special sizes are made to order

LIBRARY SUPPLIES IN ALL KINDS

F. MAMIYA & CO.

OSAKA-TOKYO-FUKUOKA

終